317
414

賜天覽台覽

日本與童文庫

# 日本歷史物語

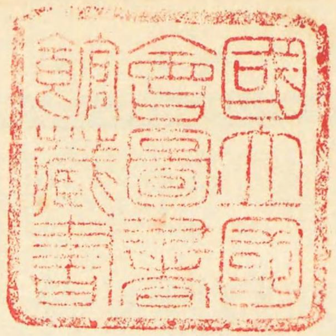
上

文學博士
喜田貞吉
著

ARS

天の岩屋戸

全集
N1



150753

# 兒童たちへ

喜田貞吉

あなたがたはすでに小學校で、日本歷史の教科書で、一通りの歷史を學ばれたことでせう。そして私どものこの日本の國が、大昔から、今日まで、どんな風にうつりかはり、そこにどんな大きな事件があつたかといふようなことは、大體知つてをられるでせう。私はそのあなたがたに、今一つ深入りして、私どものこの日本帝國は、一たいどんな風にして出來たものか、私どものこの日本民族は、一たいどんなわけのものかといふようなことを、一そう詳しく承知してもらひたいのです。

これまであなたがたの學ばれた歷史は、大抵は、誰が、いつ、どこで、どんなことをしたといふように、偉い人のことをおもに述べたものでした。それはもちろん、歷史として

# 目次


一、萬世一系の天皇陛下……三
二、日本民族（上）……五
三、日本民族（下）……九
四、天照大神……一四
五、天の岩屋戸籠り……一六
六、八岐の大蛇退治……二一
七、因幡の白兎……二六
八、出雲の大社……三一
九、天孫降臨と三種の神器……三六




大切な事柄ではありますが、併し、そればかりが歴史ではありません。日本の歴史は、精しくいへば、日本帝國全體の歴史、日本民族全體の歴史でなければなりません。昔の偉い人たちは、それ〴〵その時代の歴史の中心になつてをりましても、その人たちのことだけでは、日本の歴史は十分なものとはいはれません。それで私のこの古代史では、日本帝國の動き、日本民族の動きをおもに述べまして、私ども日本帝國の臣民は、常にどんな心がけでゐなければならぬかといふことを、あなたがたによく心得てもらひたい積りで、筆を執つて見たのです。たとひその人の名がわからなくとも、その時や場所がはっきりしなくとも、日本帝國なり、日本民族なりは、常に動いてゐるのです。そして今日の盛んな時代となつて來たのです。それをよく知らなければ、日本歴史を知つたとはいはれません。しかしそんなことは、あるひはあなたがたの讀み物としては、ちとむづかし過ぎて、わかりにくゝ、また面白くないかも知れません。そこはよく辛抱して、わからぬところは父兄のかたなり、學校の先生がたなりにお尋ねして、くりかへして讀んでもらひたいのです。

十、山幸彦と海幸彦……三九
十一、金鵄の光……四三
十二、熊襲と蝦夷(一)……五〇
十三、熊襲と蝦夷(二)……五三
十四、熊襲と蝦夷(三)……五七
十五、熊襲と蝦夷(四)……六二
十六、朝鮮半島諸國の服屬……六六
十七、外人の渡來と外國文化の輸入(一)……七二
十八、外人の渡來と外國文化の輸入(二)……七五
十九、外人の渡來と外國文化の輸入(三)……七九
二十、外人の渡來と外國文化の輸入(四)……八四
二十一、外人の渡來と外國文化の輸入(五)……八七



二十二、外人の渡來と外國文化の輸入(六)……九一
二十三、大臣と大連……九四
二十四、佛教の傳來……九七
二十五、聖德太子と文化の進展(上)……一〇二
二十六、聖德太子と文化の進展(下)……一〇六
二十七、大化の新政(上)……一一一
二十八、大化の新政(中)……一一五
二十九、大化の新政(下)……一二二
三十、朝鮮半島諸國の離反……一二六
三十一、奈良の都(上)……一三二
三十二、奈良の都(下)……一三六
三十三、奈良朝佛教の隆盛(上)……一四〇

三十四、奈良朝佛教の隆盛（下）……一四五
三十五、奈良時代の行き詰り……一五〇
三十六、平安遷都……一五五
三十七、藤原氏の全盛（一）……一六〇
三十八、藤原氏の全盛（二）……一六四
三十九、藤原氏の全盛（三）……一六七
四十、藤原氏の全盛（四）……一七三
四十一、地方政治の亂れ（一）……一七六
四十二、地方政治の亂れ（二）……一八二
四十三、地方政治の亂れ（三）……一八五
四十四、地方政治の亂れ（四）……一八八
四十五、武士、僧兵、海賊の起り（一）……一九二



四十六、武士、僧兵、海賊の起り（二）……一九七
四十七、武士、僧兵、海賊の起り（三）……二〇二
四十八、武士、僧兵、海賊の起り（四）……二〇六
四十九、平安朝の佛教……二一三
五十、蝦夷地の經營……二一七
五十一、前九年の役（一）……二二三
五十二、前九年の役（二）……二二七
五十三、後三年の役……二三三
五十四、平泉の隆盛……二三八
五十五、古代史の回顧……二四二

# 日本歴史物語（上）

裝幀・恩地孝四郎
口繪挿畫・小村雪岱

# 一、萬世一系の天皇陛下

世界に國の數はたくさんありますが、私共の住んでゐるこの大日本帝國のように、『萬世一系』と申して、遠い〳〵大昔から、いつまでも〳〵、同じ御血統の天皇陛下を上にいたゞき奉り、また『天壤無窮』と申して、天地のあらん限り、いつまでも決して變ることのないといふような、そんな名譽ある國は外には一つもありません。

何分廣い世界のことですから、日本よりも早く開けた所もないではありません。しかしそこに出來た國も、あるひは起つたり、あるひはつぶれたり、又そこに住んでゐる人間も入れかはつたり致しまして、我が日本のように、初めから決して變らぬといふ國は、外には一つもないのです。ごく近いころになつても、滅んだ國や、始まつた國が、世界にはたくさんあるのであります。そのように外の國が、たび〳〵變つてゐる中にあつて、たゞひ

とりこの大日本帝國ばかりは、何千年前からだか、何萬年前からだか、とてもわからない程の遠い〳〵大昔から始まつて、いつまでも〳〵、決して變ることがないのです。この名譽ある國に生れた私共は、なんといふ仕合せなことでありませう。

我が皇室の御先祖で、初めてこの國へおいでになりましたお方を、瓊瓊杵尊と申し上げます。瓊瓊杵尊が初めてこの國へおいでになりました時に、天照大神は、

「この國は我が子孫の君たるべき地なり。汝皇孫ゆいてをさめよ。皇位の盛んなること、天地と共にきはまりなかるべし」

と、おつしやいましたと、私共大日本帝國の國民は、先祖以來語り傳へて、堅く〳〵信じてゐるのであります。我が『萬世一系天壤無窮』の皇室は、こんな古い時代から始まりまして、私共日本の國民は、先祖以來この堅い〳〵心持ちで、上下心を一にして、この皇室をうやまひ、この帝國を守り、これを盛んにし、共々に幸福になることの爲につとめて參りました。私共は、私共の子孫の末々までも、さらにこの堅い〳〵心持ちで、この名譽



ある皇室をうやまひ、この名譽ある帝國を守り、ます〳〵これを盛んにして、一層幸福になることにつとめねばなりません。それには、この國の尊い歴史を、よく〳〵心得て置くことが、一番大切なのであります。これから私は、皆さんが小學校の教科書で學んだところを本として、精しくこの國の起りや、その後の移り變りのことをお話し致しませう。

## 二、日本民族（上）

私共この名譽ある大日本帝國の人民は、これを『日本民族』と申します。日本民族は、皇室すなはち、萬世一系の天皇陛下の御家を、總御本家と上に戴いて、お互に一家親類のような親しみを持つてゐるのであります。

日本民族と申しても、大昔からたゞ一つの血統が、雜りけなしに、今日までそのまゝ續いてゐると申すのではありません。又皇室を總御本家と仰ぎ奉ると申しても、すべての人

民が、皆皇室から分れ出たと申すのでもありません。皇室の御先祖の瓊瓊杵尊が、この國へおいでになりました時にも、すでにこの國には、たくさんの人間が住んでゐたのです。そして皇室の御先祖は、外國でよく見るように、その前からゐるたくさんの人間を、あるひは殺したり、あるひは追ひ出したりして、その國をお取りになつたのではありません。前から住んでゐた人間を、いたはり、いつくしみ、教へ、導いて、皆そのお仲間にしておしまひになつたのです。

皇室の御先祖は、なんの爲にこの國にお出でになつたのでありませう。天照大神は、なんの爲に、「この國は我が子孫の君たるべき地なり」とお定めになつたのでありませう。

瓊瓊杵尊は、「豐葦原の瑞穗の國を、安國と平けく治しめせ」といふ、天照大神の御命令を受けて、この國へおいでになつたのだと申し傳へてをります。『豐葦原の瑞穗の國』とは、我が日本のことです。我が日本の國には、水がかりのよい平地が多くて、葦がよく繁つてをりました。又それを田地にして、稻を植ゑますと、稻の穗がよくみのりますから、



それで豐葦原の瑞穗の國といつたのです。又『治しめす』とは、お治めになるといふことで、その豐葦原の瑞穗の國を、安い國として、平かにお治めになるようにと申すのが、瓊瓊杵尊のこの國においでになりました御目的でありました。ですから、前から住んでゐる人々を、お苦しめになる筈は決してありません。これをいたはり、これをいつくしみ、これを教へ、これを導いて、皆同じお仲間になさつたのは、このありがたい天照大神の御命令に從つて、人民を幸福にしてやらうとの、尊いおぼしめしからであつたのです。

瓊瓊杵尊のおいでにならぬ前から、この日本の土地に住んでをつたたくさんの人々は、まことに氣の毒なありさまでありました。人間の數は多くても、それを一つにして、安い國と、平かに治める程のものが、まだどこにもなかつたのです。もちろんその中には、後に精しくお話し致しますが、大國主神と申すお方が、そのお名前の通りに、大きな國の主となられて、人民を治めてをられましたけれども、それも日本全體からいへば、ほんの一部分に過ぎなかつたのです。その外の地方では、強いものがそのあたりの人々を從へて、

お互に爭ひばかりして、世の中は一向開けず、大體から申すと、すべての人が、まことに氣の毒なありさまであつたのです。

そこへ皇室の御先祖はおいでになりました。そして天照大神の御命令通りに、それをだん〳〵と安い國として、平かにお治めになりました。それから後も御代々の天皇は、その御精神をおつぎになりまして、次第に遠方のものをもお從へになり、前から住んでをつた人々は、皇室の御先祖のお供をしてこの國に來たものと、みんな一つになつてしまつて、私共日本民族といふものが出來たのです。

皇室の御先祖がおいでになりました後にも、外國からこの國のよいことを聞きまして、移住して來たものがたくさんあります。しかし日本民族は、それらの人々をも、別に除け者にすることなく、皆同じ仲間にしてしまひました。



# 三、日本民族（下）

このようにして我が日本民族は出來上つたのです。そして天皇の御德が遠くにまで行き渡り、日本帝國が廣くなればなる程、日本民族の仲間は殖えて參ります。日本民族は、今も外國ではよく見るように、自分と違つた仲間を、いつまでも除け者にするようなことは、決してありませんでした。日本帝國の中に住んだものは、いつの間にか、皆同じ仲間にしてしまひました。もとは違つたものであつても、ながく一しよに住んでゐるうちには、皆同じ言葉を使ひ、同じ心持ちになり、同じ風俗をして、同じ日本民族になつてしまつたのです。例へば一つの家庭のうちで、お母さんは外の家からお嫁に來た人、お祖父さんは外の家から養子に來た人であつても、その家の人になれば、皆同じ親しい家族になつてしまふようなものです。

同じ仲間になつた日本民族は、たゞ同じ言葉を使ひ、同じ心持ちになり、同じ風俗をしてゐるといふばかりでなく、實際は皆親類になつてしまつて、すべての日本民族には、皆同じ血が流れてゐるのです。

その一つの例として、皇室の御先祖の事を申し上げるのは、まことに恐れ多い次第ではありますが、瓊瓊杵尊がこの國へおいでになりまして、お妃にお迎へになりましたのは、木花開耶姫と申して、前からこの國にをられたお方でありました。そしてその間にお生れになりましたのが、彦火火出見尊で、そのお妃の豐玉姫は、やはり前からこの國にをられたお方です。次ぎの鵜草葺不合尊のお妃の玉依姫も、また同じく前からこの國にをられましたお方で、この鵜草葺不合尊と、お妃の玉依姫との間にお生れになりましたのが、我が國の天皇として、第一代の神武天皇であらせられます。その神武天皇も、御位に即かれまして、やはり前からをられた、事代主神のお娘を、皇后にお迎へになりました。その次ぎの綏靖天皇も、またその次ぎの安寧天皇も、皇后は皆同じように、前からこの國に



をられたお方々でありました。

日本の古い語り傳へでは、日本人の先祖は『神』であり、その神々の『時代』を『神代』と申します。そして瓊瓊杵尊は高天原からこの國においでになりましたので、その高天原の神々を、『天津神』と申し。尊のおいでになる前から、この國にをられた神々を、『國津神』と申しますが、その天津神と國津神との關係は、天津神は夫であり、國津神は妻であり、天津神は父であり、國津神は母であるといふ、最もお親しい間柄になつてゐるのです。

こんな工合に、我が皇室の御先祖たちは、前からこの國に住んでをられたお方々と、御代々御結婚を遊ばされたのでありましたが、瓊瓊杵尊にお供をして、一しよにこの國に來ましたものも、やはり同じように、あれは前からこの國にゐたものだからの、これは後に外國から移住して來たものだからのなどといつて、それらの人々を、除け者にするような事はなく、お互に仲よくし、お互に結婚もしまして、長い間には、皆親類同士の間柄になり、たとひ多いか少いかの違ひはありましても、ともかくすべての日本民族には、みな同

じ血が流れるようになつてしまつたのです。

それは私共が、私共の先祖の事を考へて見れば、よく合點が行きませう。私共には皆二人づゝの親があり。その二人の親には、また二人づゝの親がありまして、つまりお祖父さんが二人、お祖母さんが二人と、二代前には四人づゝの親があるわけです。そしてその四人の親には、また二人づゝの親がありますから、三代前には八人、四代前には十六人、五代前には三十二人、六代前には六十四人と、一代ごとに親の數が二倍になります。そして十代前には千二十四人の親があり、十五代前には三萬二千七百六十八人の親があり、二十代前には、百四萬八千五百七十六人の親があつたわけです。もちろん、そのうちには、親類同士が夫婦になつたものもありませうから、この勘定通りには參りませんが、まあこんな風に、三十代、四十代、五十代と、遠い〳〵昔のことをたづねて見ましたならば、とても口ではいへない程のたくさんの先祖があつたわけで、それらのたくさんの人々の血が、皆この私共の身體の中を流れてゐる筈なのであります。



かう考へて見ますと、すべての日本民族は、みな遠いか、近いか、親類同士の間柄であり、すべての日本人には、多いか、少いか、皆同じ血が流れてゐるわけでありまして、恐れ多くも上に萬世一系の皇室を、その總御本家といたゞき奉り、みんなが一家一族の親しみを持つてゐるといふことが、よくわかつて來るでありませう。

よく世間では、源氏の先祖は清和天皇だ、藤原氏の先祖は大織冠鎌足だ。誰の先祖は何の某だなどと申しまして、先祖は一人しかないものゝように思ひ、家柄が違へば、先祖が違ふようにいひますが、それはたゞ、男親の方だけのことを見ていつたので、人間がみな兩親の血をうけて生れたことを、忘れてしまつてゐるのです。それで、もし私共の、遠い遠い先祖の血統を尋ねて見ましたならば、昔の人は大抵、今の日本人のお互の先祖と申してよいのであります。恐れ多いことを申すようではありますが、皇室の御方々のお體に流れてをります血も、私共一般日本臣民の身體に流れてをります血も、皆同じ日本民族の血でありまして、皇室もまた私共日本臣民と、遠いか近いかの親類關係にあらせられ

ると、申し上げましてよろしいのであります。

これから私は、それならばどんな風にして、我が日本民族が出來上つたか、どんな風にして、我が日本の國は盛んになつたか、だん〳〵とそのお話を致しませう。

## 四、天照大神

我が皇室の一番遠い御先祖を、天照大神と申し上げます。この國へ初めておいでになりました瓊瓊杵尊は、この天照大神のお孫樣であらせられるのです。

何分にも遠い〳〵大昔のことでありますから、今日から精しいことはとてもわかりかねますが、私共の先祖たちは、日本の大昔は神代であり、私共日本人の遠い先祖は神であつたと語り傳へてをります。そしてその神々の數が大層多いので、ひっくるめて、それを八百萬神などと申します。もっとも今日神としてお祭りしてをるのは、この神代の神々



たちばかりではありません。後の時代の人々でも、德が高く、功が多かつたものは、やはり神としてお祭りするのでありますが、その多くの神々の中でも、天照大神は一番尊い神であらせられます。

私共の先祖たちは、天照大神のお國を、高天原と申して、大空にある國であり、また大神を、日の神であらせられると語り傳へてをります。毎日々々天から日が照らしてくれますがために、動物も、植物も、皆育つことが出來るのです。天照大神のお德によつて、この名譽ある日本の國も始まり、すべてのものが幸福に、暮らして行くことが出來るのだと、私共は先祖以來、堅く〳〵信じて、これをうやまひ奉つてゐるのです。

この神代のことについて、私共の先祖たちは、かういふ風に語り傳へてをりました。

昔、昔、大昔に、伊弉諾神、伊弉冉神と申される、お二方の神がありました。日本の國も、その國にゐる山の神も、海の神も、木の神も、草の神も、風の神も、火の神も、あらゆる神々、皆このお二方の神がお生みになつたと申すのです。そして天照大神もまた、

このお二方の神のお子様として、お生れになりましたと申し傳へてゐるのであります。

ところが、天照大神は、外の神々たちよりも、殊に尊い神であらせられまして、その御光が、世の中を照らし輝くといふような、極めてお德のお高いお方でありましたから、親神たちはこれを高天原へお送り申して、その國をお治めになるようにと、お定めになりましたのだと申し傳へてをります。

## 五、天の岩屋戸籠り

天照大神の御弟様に、素戔嗚尊と申されるお方がありました。お小さい時から、大そう御元氣のおよろしい、惡戯好きのお方でありまして、たび〳〵大神に御迷惑をおかけになりました。しかし大神は、いつもそれを大目に御覽になりまして、一向お咎めなさいませんでした。大神が水田をおつくりになりますと、その田の畔を切り離して、田の水を流



してしまつたり、用水の溝を埋めて、水を通らなくしたりなさいます。しかし大神は、それをお咎めにならないで、

「あれは大方、畔や溝のために、大事の地面をつぶすのが惜しいと思つて、それであんなことをしたのであらう」

と、おつしやいます。大神がお食事を遊ばしていらつしやいますと、そこへ穢いものを出して、お困らせになります。それでも大神は、

「あれは大方酒に醉うて、ついきたないものを吐いたのであらう」

と、おつしやいまして、やはりお咎めになりません。しかし素戔嗚尊のお惡戯は、ますますひどくなりました。大神が機をお織らせになつてゐられました時に、尊は馬の皮をむいて、赤裸になつたのを、家根をこはしてその中へ追ひ込まれました。それを見た機織り女はびっくりして、とう〳〵死んでしまひました。これにはさすがの大神も、もう御辛抱がお出來にならなくなりまして、天の岩屋にお籠りになり、岩戸を閉めて隱れておしまひに

なりました。

さあ大變です。日の神樣がお姿をお隱しになつたのですから、世の中は眞暗闇です。岩戸を堅く閉めておいでになりますから、いつまでたつても夜の明けっこがありません。何をするにも松明の明りがいるようになりました。惡い神々は、時を得たりと勝手なわがままを致します。八百萬の神々たちも、これにはひどく困りまして、どうかして大神に、岩戸から出ていたゞきますようにと、皆集つて相談を致しました。しかし何分にも大神が、ひどくお懲りになつてをられるのでありますから、これはたゞお願ひ申しただけでは、とてもお出ましにはなりますまい。恐れ多いことではあるが、一つ大神をお欺し申して、出ていたゞくより外はないと、相談が一決しました。

そこで先づ常世の長鳴き鳥といふ鷄を集めます。石凝姥命に八咫鏡を作らせます。玉祖命に八坂瓊曲玉を作らせます。八咫鏡とは大きな鏡と申すこと、八坂瓊曲玉とは、いろ〳〵の玉をたくさん長い緒に通したものゝことです。その鏡と玉とを、青や白の布と



共に榊の枝にかけて、忌部氏の先祖の太玉命が、それを持つて岩戸の前に立ちます。中臣氏の先祖の天兒屋命が、お出ましを願ふ役をつとめます。力の強い手力男神が、岩戸の蔭に隱れて、いざといはゞ、すぐに戸をあけて、大神をお出し申す手筈です。用意がいよいよ出來たところで、岩戸の前で庭火をあか〳〵と焚き、滑稽な鈿女命が、ふざけた身振りをして、踊を踊りましたので、これまで大神のお出ましがないために、ひどく悲しんでゐた八百萬の神々たちも、これには思はず大笑ひに笑はされました。庭火で明るくなつたので、集めたたくさんの鷄も、一度にこっけっこーと鳴きました。

天照大神は、岩戸の中でそれをお聞きになりまして、大そう不思議にお思ひになりました。御自分が天の岩戸にお籠りになりましたので、世の中は眞暗闇になり、八百萬の神神たちも、定めて悲しんでゐることであらうとおぼしめされましたのに、これは又どうしたことか、岩戸の外では大そう面白そうに、賑やかに騷いでをるではありませんか。これは變だなと大神は、少し岩戸を細目にあけて御覽になりますと、外は明るく、鷄は鳴く、

まるで夜が明けたようです。悲しんでゐる筈の八百萬の神々たちは、いかにも嬉しそうに、大笑ひをしてをります。

「これは一體どうしたことだ」

と、鈿女命にお聞きになりますと、鈿女命は、

「大神よりも貴い神がおいでになりましたから、皆樂しく笑うてゐるのでございます」

と、お答へ申し上げました。それと同時に天兒屋命と太玉命とが、

「これが大神よりも貴い神でございます」

と、かねて用意の八咫鏡をさし出して、お目にかけました。ところがその鏡が、大神のお光に照らされて、別の日の神が現れでもしたように、きら〳〵と光り輝きました。

大神はいよ〳〵不思議に思し召されて、少しばかり岩戸からお出ましになりました。今こそと手力男神は、御手を取つて外へお出し申し、天兒屋命と太玉命とは、早速後へ七五三縄を張つて、再びおはひりになりませぬようにと、お願ひ申し上げました。これから



世の中は再び明るくなり、八百萬の神々たちも、ほんとうに心から、手を拍ち、聲をあげて、喜びましたと申します。

## 六、八岐の大蛇退治

天照大神の、天の岩屋戸籠り遊ばされましたのも、つまりは素戔嗚尊のお惡戯が、あまりにおひどかつた爲であつたので、大神のお出ましをお願ひ申した後で、八百萬の神々たちは、共々に相談して、尊を高天原から追ひ出してしまひました。

素戔嗚尊も、もと〳〵御自分がお惡かつたのですから、今更なんとも致し方がありません。高天原から出て來られまして、とぼ〳〵と出雲の國の、簸の川の川上までおいでになりました。そこはひどい山の奥で、とても人間などのゐそうな所ではありません。それだのにその川上から、箸が流れてまゐります。猿や熊では箸を使つて物をたべる筈はありま

せん。さてはまだこの山奥にも、人間が住んでゐるのだなと、尊はだん〳〵尋ねてお登りになりますと、そこには果して老人夫婦が、一人の少女を間に置いて、泣いてゐるではありませんか。

「お前たちは一體どうしたといふのだ」

尊はお尋ねになりました。

「私どもは古くから、こゝに住んでをりますもので、私の名は手名椎、妻の名は足名椎、娘の名は奇稲田姫と申します。私どもには、外にもたくさんの娘がありましたが、外の娘どもは皆、高志の八岐の大蛇に取られまして、今ではこの娘一人になりました。それも今は取られる頃となりましたので、どうにも仕様がなく、悲しんでゐるのでございます」

と、老人は答へました。

「それはさて〳〵氣の毒なことぢや」

と、もと〳〵元氣のすぐれた、又あはれみ深い御性質のお方でありましたから、素戔嗚尊

は、早速その大蛇を退治して、人民の難儀を救つてやらうと、御決心になりました。

しかし何分にも、頭が八つ、尾が八つに分れて、その長さが、山々から、谷々に渡つてゐるといふほどの、恐ろしい大蛇のことでありますから、退治するといつても、容易なことではありません。計略をもつて殺すがよいとのお考へで、よい酒をたくさん作つて、大蛇の來る頃を見計らつて、それを勝手に飲むようにと、用意して置きました。

そんな恐ろしい計略があるとは知らぬ、酒ずきの大蛇は、これは御馳走と、すきなだけその酒を飲んだものですからたまりません。奇稲田姫のことなども、つい忘れてしまつて、よい心地になつて眠つてしまひました。それを見すまして素戔嗚尊は、お腰の十握劍を拔いて、大蛇をずた〳〵にお切りになりました。さすがの大蛇も、これでは一たまりもありません。もろくもそのまゝ死んでしまひました。

尊が大蛇をお切りになつた時に、その尻尾から一ふりの劍が出て來ました。これは尊いものだと、それを天照大神に御獻上になりました。これを天叢雲劍と申します。大蛇



のゐる所には、いつも雲がむらがり立つてをりましたから、それでさう申すのです。

この八岐の大蛇は、高志の八岐の大蛇と申しまして、こしといふ遠い國から、はる〳〵と越後など、東北の方にあたる日本海方面の地方のことです。大昔には、このあたりは、まだ一向開けないので、力の強い、亂暴なものがたくさんをつて、出雲のような遠方の人々までが、しば〳〵ひどい目にあはされたのです。それを素戔嗚尊がお救ひなされ、その國をお從へになつたのが、この高志の八岐の大蛇退治といふ、面白いお話になつて、語り傳へられたのであります。またその大蛇から叢雲劍が出て、それを尊が天照大神に奉つたと申すのは、このこしの國を治める力を、大神に御獻上なされたと申す事であります。

かう申すと、素戔嗚尊はこしの人を殺して、その國を取り、これを天照大神にさしあげたといふようにも聞えますが、決してさうではありません。いくら教へても、導いても、それを聞かずに亂暴をなし、他のものに害をなして、どうしても手にあはぬようなもの

は、仕方なしに殺しも致しませうが、さうでないものは、やはり親切にいたはつて、同じ仲間になされたのです。それは次ぎにお話しする大國主神が、高志の沼河姫といふ女を、お妃になされたと申すお話からでもわかりませう。

## 七、因幡の白兎

素戔嗚尊の御子に、大國主神といふお方がありました。大そうお強い、しかしおとなしい、おなさけ深い性質のお方です。

大國主神には、大ぜいの御兄弟の神たちがありましたが、中にもこの神は、一番おとなしかつたので、皆で揃うて外出でもする時などには、いつも荷物を持たされて、お供をさせられてをりました。

ある時大國主神は、いつもの通り、大ぜいの神たちのお供をして、袋をかついで、少し



おくれて、因幡の國の氣多の崎といふ所を通つてをられますと、丸裸になつた兎が、さも痛そうにひい〳〵と泣いてをります。それを見た大ぜいの神たちは、

「兎よ、兎よ、お前はなぜそんな形をして泣いてゐるか」

と、お尋ねになりました。すると兎は、痛いのを辛抱して、長々とそのわけを申し上げました。

もとこの兎は、隱岐の島にゐたのでした。その島からこちらへ渡らうと思ひましたが、兎の力では遠い海を越えることが出來ません。これは一つ海のわにを欺して、隱岐からこまで、橋をかけたように列ばせて、その上をぴょん〳〵飛んで渡らうと、横着なことを考へつきました。

「わにさん、わにさん、お前たちの仲間と、私たちの仲間と、どちらが多いであらうか。あるだけのわにが皆出て來て、この隱岐の島から、因幡の氣多の崎まで、一列に列んで見なさい。私がその上を走りながら、お前たちの數をかぞへて見よう」

欺されるとは知らないわには、兎のいふ通りに、正直に列びましたから、ちょうど隱岐から因幡まで、一つの長い〜〜わに橋が出來ました。それを兎は、一つ、二つと、數をかぞへる眞似をして、ぴょん〜〜〜と飛んで來ました。いよ〜〜今一跳ねで、こちらの岸へ飛び上らうといふところで、默つてゐればよいのに、愚な兎は、

「お前たちは馬鹿だな、うまく私に欺された。どうも御苦勞樣」

と、餘計な口をきゝましたから、さあたまりません。欺されたわには大そう怒つて、一番おしまひにゐたのが、その兎をつかまへて、丸裸に引きむいてしまつたのです。こゝにわにと申すのは、鰐鯊といふ鱶の類の大魚で、今いふ熱帶地方の鰐の事ではありません。

兎は餘計な口をきいた爲に、ひどい目にあはされましたが、もと〜〜自分が惡かつたのですから、今更なんとも致し方がありません。しかしそれでも、痛くてたまらないので、海岸で苦しんでをりますと、そこへちょうど大せいの神々たちが、お通りかゝりになりましたのです。同情のない神たちでしたから、その話を聞いて、兎に惡い事を敎へました。

「兎よ、兎よ、その傷が痛むなら、潮水を浴びて、高い、風あたりのよい所で、寝てゐたなら、じきになほつてしまふよ」

といふのです。なんといふ可愛そうな惡戯をしたものでせう。さうでなくてさへ痛くて痛くてたまらないのに、潮水をあびて、風に吹かれたなら、一層ひどくなるのは知れたことです。しかし愚な兎は、そんなことに氣がつきません。教へられた通りに、正直にやりましたから、たまりません。忽ち體中が、ぴり〳〵と、ひどく痛み出して、辛抱が出來なくなつて泣いてゐたのです。

おなさけ深い大國主神は、そのわけをお聞きになりまして、

「それは飛んでもないこと、さて〳〵可愛そうなことをしたものだ。はやく川水でその潮をよく洗ひ落して、蒲の穗をほぐして、そこへまき散らして、その上で寢ころんでゐよ」

と、お教へになりました。兎はその通りにしますと、蒲の穗が體中について、すつかりもとの毛の通りになりました。兎は大そう喜びまして、



「あなたはほんとうに、おなさけ深いお方でいらつしやいます。あなたのお望みは、きつとかなひます」

と申しました。

兎の申した通りに、その後大國主神は、だん〳〵おえらくなりまして、出雲の地方を從へになり、外の神々たちも國を讓つて、つひにお名前通りの、大きな國の主になられました。そして遠く越の國へまでもおいでになつて、高志の沼河姫をお妃になさいました。これは大國主神が、越の國をもお從へになつて、その住民を、同じ仲間になさつたことを、語り傳へたものと見えます。

## 八、出雲の大社

出雲の地方は大國主神のお力によつて、『大國の主』とお名前に呼ばれるまでに、かなり

大きな國になりましたが、しかし我が日本の中には、外にもまだ小さい國がたくさんにありまして、お互に爭ひばかりしてゐたのです。それですから一般の人民の不幸は、一通りではありませんでした。これは前にも申した通り、すべてを一纏めにして、これを治める程の、えらいものがゐなかつた爲でありました。

そこで天照大神は、いよ〳〵御孫の瓊瓊杵尊をこの國にお降しになつて、これを安い國として、平かにお治めしめなさることになりましたが、それには先づ以て、大國主神の國を奉らしめなければなりません。これが爲に、三度まで使ひをつかはしになりました。しかし何分大國主神の威勢が盛んなものですから、使ひの神も、その方へついてしまつて、歸つて參りませんでした。最後に武甕槌神と、經津主神とが、お使ひに立ちました。武甕槌神は後に常陸の鹿島神宮に、また經津主神は後に下總の香取神宮に、それ〴〵軍神としてお祭り申した程の、武勇勝れた神々でありましたから、大國主神の威勢にも恐れず、よく利害をお說きになり、國を天孫に奉るようにとお諭しになりました。天孫とは瓊瓊杵尊の



御事を申すのです。しかしこれは大國主神に取つては、まことに重大な事件です。御自身だけのお考へでは、おはからひかねになりました。そこで先づもつて、御子の事代主神の御意見をお問ひになりましたところが、この時出雲の美保が崎で、魚を釣つてをられました事代主神は、

「それはもちろん、大神の仰せに從ひますよう」

と、いさぎよく御同意申し上げました。出雲の美保神社は、こゝで釣りをしてをられました緣故で、この事代主神をお祭りしてあるのです。

かく事代主神が御贊成申したので、大國主神も今は御異存もなく、久しく治めてをられました國を、天孫にさしあげましたが、事代主神の弟神の建御名方神は、大そう元氣の盛んな神でありましたから、なか〳〵それを承知致しません。

「それなら大神のお使ひの神たちと、力競べをして見よう」

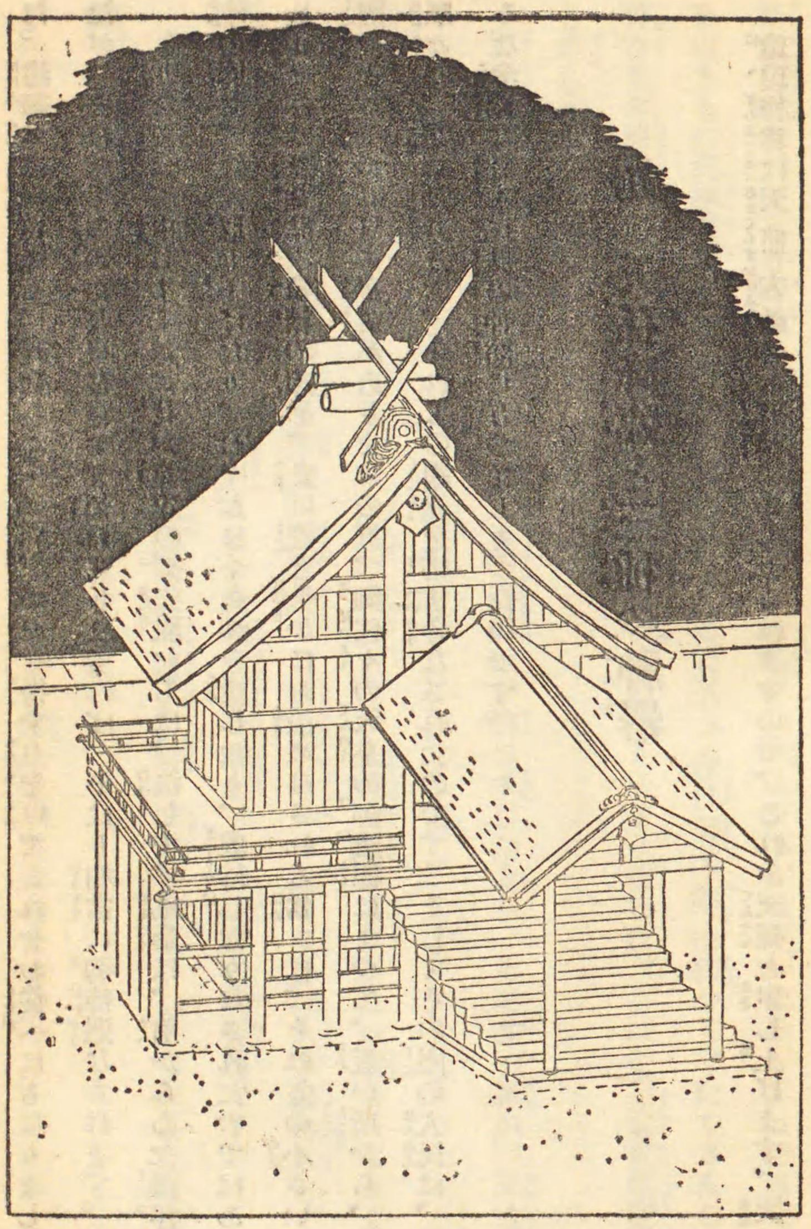
と申しました。しかし建御名方神の力は、とても武甕槌神にかなひつこはありません。と

うとう信濃の諏訪まで逃げて行つて、そこで恐れ入りました。今の諏訪神社は、その土地にこの神をお祭り申したのです。

大國主神は、いよ〳〵その國をさしあげましたについて、杵築の宮にお引き籠りになりました。これは今の出雲の大社で、その御殿は、天孫の御宮殿と同じように、お造り申したといふことであります。命が大神の命を奉じて、いさぎよくその國を治めることを、天孫にお任せ申しあげましたので、天孫の方からは、特別の尊敬をもつて、これを御待遇なされましたわけなのです。

大國主神の國の外にも前にも申した通り、我が國にはもとたくさんの小さい國がありました。しかしその中でも、一番御盛んな大國主神が、いさぎよくその國を奉つたものですから、その外の國々も、だん〳〵と我が皇室の御威光に從ひまして、我が大日本帝國は、次第に大きく、次第に盛んになつて參りました。大國主神や、事代主神のように、よくことがわかつて、いさぎよくその國を奉つたものは、それ〴〵に相當の御待遇を與へられまし





た。建御名方神の如く、反抗したものは、やむを得ず力を以てこれをお從へにもなりましたが、それでも力がかなはないで、恐れ入りますれば、やはり相當に御待遇なされます。

くりかへして申しますが、我が皇室の御先祖たちは、決して、亂暴に、前からゐた國津神の國を、たゞ取り上げたり、わけもなくそれを殺したり、虐待したりなされたのではありません。豐葦原の瑞穗の國を、安い國と平かにお治めなされる爲には、それらの小さい國々を、一つにする必要がありますので、御代々の天皇の御威德によつて、近い所から、順々に、遠い所にまで、それらの國々を御併合なされたのです。そしてその國の人民は、みな幸福な日本民族の仲間になつてしまつたのです。

## 九、天孫降臨と三種の神器

瓊瓊杵尊は天照大神のお孫樣であらせられますので、これを天孫と申し上げます。天



照大神は、はじめ御子の天忍穗耳尊をこの國にお降しになるお考へでありましたが、そのうちに天孫瓊瓊杵尊がお生れになりましたので、尊は御父尊に代つて、たくさんの神々をお隨へになつて、日向の國の高千穗の峯にお降りになりました。これを「天孫降臨」と申します。

天孫の御降臨なされるに就いて、天照大神は、前に申した通り、その御子孫が、天地のあらん限り、いつまでも〳〵、この國の天皇となられます事をお定めになりまして、「三種の神器」をお授けになりました。三種の神器とは、大神が天の岩屋戸にお籠りになりました時に、石凝姥命がお造り申した八咫鏡と、玉祖命がお造り申した八坂瓊曲玉と、素戔嗚尊が八岐大蛇から得て御獻上になつた天叢雲劍と、この三つの御寶器です。

この三種の神器のうちにも、「八咫鏡」は、天照大神の御姿をおうつしになりました御鏡で、大神がこれをお授けになります時に、特に、

「この鏡はわが御魂として、常にわが前にあると思ひて、あがめたてまつれ」

と仰せになりました。それ以來この御鏡は、御代々の天皇の御宮の中で、天照大神としてお祭り申し上げてをりましたが、神武天皇から御十代目の、崇神天皇の御代になりまして、常にこれに近づき奉つて、つひ大神の御威德をおけがし申すようなことがあつては、相すまぬといふ深いお考へから、これを天皇のお宮からお出し申し上げ、別に神のお宮を造つて、そこにお祭り申すことになりました。次ぎの垂仁天皇の御代には、さらにそれを伊勢にお遷し申し、皇女倭姫命がお仕へ申し上げました。これが今の伊勢の皇大神宮であります。

『叢雲劍』もまた、はじめは御鏡と一しよに、伊勢の神宮にお祭りしたのでありましたが、これは後に景行天皇の皇子日本武尊が、東國を從へにお出かけなさいました時に、御叔母樣の倭姫命が、尊の御身の護りとして、お授けになり、尊はこれを以て、草を薙いで野火の危難をお免れになりましたので、それから『草薙劍』と申すことになりました。このことは又後にあらためて申しませう。然るにこの草薙劍は、尊がお歸りの途中、尾



張の熱田にお置きになつたまゝ、御病氣にかゝつておかくれになりましたので、そのまゝそこでお祭り申すことになりました。今の熱田神宮がこれであります。

崇神天皇は、かく御鏡と御劍とを、宮中からお出し申して、別にお祭り申すことになりましたので、はじめにこの御鏡をお造り申した、石凝姥命の子孫の人にお命じになつて、新に代りの御鏡をお造らせになり、また天目一神といふ、鍛冶の元祖の神の子孫にお命じになつて、新に代りの御劍をお造らせになりました。この新しい御鏡と、御劍とは、『八坂瓊曲玉』と共に、天皇の御位の御しるしとして、常に御身ぢかくにお置きになり、天皇の御代のかはるごとに、新しい天皇がお受けになりますこととなりました。

## 十、山幸彦と海幸彦

天孫瓊瓊杵尊が、日向の高千穗峯にお降りになりましてから御三代の間は、引き續き

日向の國においでになりました。尊のお妃の木花開耶姫の親神は、大山祇神と申して、山を御支配になる神です。またそのお子の彦火火出見尊のお妃は、豐玉姫と申して、海を御支配になる綿津見神の御子でした。これは山の神も、海の神も、皆皇室の御親類になりまして、たゞひとり稲のよく出來るといふ瑞穗の國の、平地の場所ばかりではなく、そのほかの、山も、海も、皆天皇の御德に從つたことを示してゐるのであります。

木花開耶姫は、御名の通り木の花の咲き盛つたような、至つてお美しいお方でした。ところがそのお姉さんに磐長姫と申して、御姿のおよろしくないお方がありました。瓊瓊杵尊はこの磐長姫をお嫌ひになり、木花開耶姫を妃としてお選びになつたので、それから人間の命は、木の花の開いてはやがて散るように、短くなつたのだと申します。この時に若し尊が磐長姫をお妃になさつたのであつたなら、人の命は磐のように、いつまでも〳〵、長く生きられるのであつたと申すのです。併し若し人間が生れるばかりで、いつまでも死なないものであつたなら、この世の中はどうなつてゐるでせう。



瓊瓊杵尊のお子の火闌降命は、『海幸彦』と申して、釣り針を以て海で魚をお捕りになる。又その御弟の彦火火出見尊は、『山幸彦』と申して、弓矢をもつて山で鳥や獸をお獲りになる。いつも〳〵同じ事ばかりをしてをられましたので、お互に飽きて來まして、ある時御兄弟御相談の上、釣り針と弓矢とをお取りかへになりました。そして山幸彦は海へ、海幸彦は山へと出かけられましたが、どちらも慣れぬ爲事なものですから、一日かゝつて、一つも獲物がありませんでした。これはやはりもと通りがよいと、火闌降命は、弟神の弓矢を返されました。併し困つたことには、彦火火出見尊は、釣り針を魚に取られてしまつて、お返しになることが出來ません。いろ〳〵とお詫びをなさいましたが、意地の惡い火闌降命は、どうしてもそれを御承知になりません。仕方がなく御自分のお腰の刀をつぶして、千の釣り針を作つてお返しになりましたが、それでもやつぱり元のでなければいやだと言はれます。いよ〳〵お困りになつて、若しやそこらに落ちてはゐまいかと、あてどもなく、泣きながら海岸をうろついてをられますと、そこへ鹽椎翁といふお爺さんがや

つて參りまして、そのわけを聞いてお氣の毒に思ひ、これを綿津見神の宮へとお送り申し上げました。綿津見神は海を支配する神です。尊はこの神にお賴みになつて、すべての魚を集めて調べてお貰ひになりますと、早速その釣り針を喉にさして、困つてゐる魚が見つかりました。そこで尊はそれを返してお貰ひになり、序に三年の間、お客としてこの宮に御逗留の上、綿津見神のお子の豐玉姫をお妃として、釣り針の外に、いろ〳〵寶物をお土產に貰つて、お歸りになりました。かうなればもはや尊の方が大威張りです。意地の惡い火闌降命も、今は尊の御威德に恐れ入つて降參し、犬に代つて尊のお宮の御門を衞ることになりましたと申します。昔九州の南の方には、隼人といふ人たちがをりまして、代りあつて京都へ出て、宮城の御門を衞つたり、天皇行幸の時に、お道筋を護つたりするお役をつとめてをりましたが、これは火闌降命の子孫で、代々先祖の例をついでゐたのだとのことでございます。



# 十一、金鵄の光

彥火火出見尊のお子が鵜草葺不合尊、鵜草葺不合尊のお子が、神武天皇であらせられます。天皇のまだお若い頃までは、天孫降臨以來、引きつゞき日向の國においでになりましたが、そこはあまりに西南の端に片よりすぎて、天照大神からお任せを受けたこの豐葦原の瑞穗の國を、安い國と平かにお治めになるには、御都合がおよろしくない。遠方の國々には、まだ强いものがたくさんゐて、弱いものを從へて、お互に爭つてゐるといふようなあり樣でした。そこで天皇は、御兄樣がたと御一しよに、日本の眞中の、大和の國にお移りになり、それからだん〳〵、四方の國々をお平げになりたいとのお考へで、日向をあとに、海路を、東へ〳〵とお進みになりました。

ところが、その頃大和平野には、長髓彥を始めとして、强いものが大せいをりまして、

天皇のお移りになる事を拒みます。中にも長髄彦は、これもやはり天津神のお子の饒速日命といふお方をいたゞいて、勢力が最も盛んでした。

天皇はお船で瀬戸内海から、浪速にお着きになりました。浪速とは今の大阪の事です。今の大阪附近の平地は、その後だん〳〵と、淀川や、大和川から流れて來る砂が、積り積つて出來たので、その頃には、大阪灣はまだ〳〵東の方まで入り込み、大和川がそこへ流れ込んでゐたのでした。そこで天皇は、河内の日下といふところまで、船でお進みになり、河内と大和との境の、生駒山を越えて、大和平野へおはひりにならうとなさいますと、長髄彦がこれを防いで、戰爭になりました。この戰爭は、天皇の軍の御敗北で、おいたはしくも御兄樣の五瀬命は、敵の箭に中つたのがもとで、つひにおなくなりになりました。

「我は日の神の子孫として、日の進む方に逆らつて、西から東へ向つて進んだから惡かつたのだ。これから南へ大まはりして、日の神の威光を背に負うて、東の方から大和平野に進入しよう」



天皇はかうお考へになりました。それで紀伊の方から、熊野の山の中を過ぎて、大和の東部、宇陀といふところへお出でになりました。何しろ木が森々と繁つた、道もない山の中で、どちらへ行つたがよいか、方角さへもよくわかりません。お困りになつてをられますと、そこへ八咫烏といふ大きな烏があらはれて、御案内を致しました。その烏の飛ぶ方について、大伴氏の先祖の道臣命が、木を伐り、道を開いて、御無事に大和平野の東の方の、宇陀にお着きになつたのです。

この時宇陀には、兄猾、弟猾、又その西の磯城といふところには、兄磯城、弟磯城など、その外にも、大和平野には、たくさんの強いものがゐました。その中で弟猾と弟磯城とが、先づ天皇にお從ひ申して、忠義をつくしましたので、天皇は、御命令に從はない兄猾、兄磯城等を滅ぼされまして、いよ〳〵長髄彦を御征伐なさることとなりました。併し長髄彦はなか〳〵強くて、容易にお勝ちになることが出來ません。ところへ不思議や、忽ち空が眞暗になつて、恐ろしい雹が降り出し、金色の鵄があらはれて、天皇のお弓の弭に止まりま

した。その光がきら〳〵と、稲光のように輝くので、敵の兵隊は目が眩んで、向ふことが出來なくなり、つひに天皇の軍の大勝利となりました。今の金鵄勳章は、このめでたい大勝利を記念して、戰爭の時勳功の殊に著しいものに與へて、その名譽をあらはす爲に、明治の御代に御定めになつた勳章です。

饒速日命は、天皇と同じく天津神の御子で、はやく大和へ降つてをられたのではありますが、天皇の方が、この豐葦原の瑞穗の國を、安い國と、平かにお治めになるようにと、天照大神から御命令を受けて、お降りになりました天孫の御正統のお方であらせられるので、命はいさぎよくこれに從ひ奉るようにと、長髓彥におすゝめになりましたけれども、長髓彥は頑固で、どうしてもそれを聞き入れません。そこで命は致し方なく、長髓彥を殺して、高天原からお降りの時にお持ちになつた、十種の寶物を獻上して、天皇にお仕へ申すことになりました。

かくて大和平野も、悉く平ぎましたので、天皇は畝傍山の東南の、橿原といふ所に

宮殿をお建てになり、初めて御即位の大禮を行はせられました。これは今年戊辰の年から、二千五百八十八年前の、辛酉の年、正月の元日であります。これを我が國では紀元元年と定め、その正月元日は、今の暦にあてますと、二月十一日になりますから、その日を紀元節として、お祝ひ申す事になつてをります。又そのお宮のあつた橿原の地には、明治天皇の御代に橿原神宮を建てゝ、神武天皇をお祭り申すことゝなりました。

天皇御即位の後、手柄のあつた人々にそれ〴〵賞をお與へになりました。その中には、海路の御案内を申した珍彦といふ土人や、大和にあつて早く天皇にお從ひ申した弟猾、弟磯城などの土人もありまして、それ〴〵國造とか、縣主とかいふのは、ともに一地方の領主で、代々その土地にをつて、人民を支配して、天皇にお仕へ申したものです。

天皇は又、前に申した通り、事代主神の御子の、媛蹈鞴五十鈴媛命と申されるお方を、皇后としてお迎へになりました。一説に大國主神の御子だともありますが、いづれに致し



ても、天孫降臨以前に、すでに大國の主として、この國土や人民を領し、それをいさぎよく天孫に奉つたと申す名家で、國津神の代表者とも申すべき御家柄でした。

こんなあり樣で、我が皇室の起りは、強いものが暴力で土人を苦しめ、その國を奪つたといふような次第ではありませんでした。くりかへして申す通り、もと〳〵我が國には統一がなくて、お互に相爭ひ、みんなが苦しんでをつたといふばかりでなく、世の中も開けず、生活も豐でなく、まことに氣の毒な樣子であつたこの豐葦原の瑞穗の國を、安い國と平かにお治めになつて、すべてが幸福になるようにとの、天照大神の御命令によつて、これを統一なさらうといふ爲でした。それ故に、どこまでも抵抗して、邪魔になるものは、やむを得ずお殺しにもなりましたが、命を奉じて忠義をつくしたものは、土人であつても、それ〴〵一地方の領主とお取り立てになる。皇后も、前からこの國にをられた名家からお迎へになる。もちろん日向からお供をして、大和御平定に功の多かつた道臣命をはじめとして、有功の人々が、御優待に預かつた事は申すまでもありません。長髓彦を殺してお

従ひ申した、饒速日命の如きは、特に御信頼になつて、宮中をお護り申す近衛のお役をお任せになりました。それから後、その子孫の物部氏は、道臣命の子孫の大伴氏と相並んで、久しく皇室と國家とをお護り申す兵隊の頭となりました。

## 十二、熊襲と蝦夷（一）

人皇第一代神武天皇が大和平野をお定めになり、天皇の御位に即かれましてから後、綏靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、開化と、御代々の天皇の御德澤は、次ぎから次ぎへと及びまして、日本帝國の領分は、だん〳〵と廣くなり、その住民は、次第に日本民族の仲間になつて參りました。それでもまだ遠方には、天皇の御德のありがたいことを知らず、日本民族の仲間に加はることの幸福を解せず、昔のまゝに、相變らず氣の毒な生活をしてゐるものも、たくさんにありました。これでは天照大神のお指し圖通りに、豐葦



原の瑞穗の國を、安國と平かにお治めになるといふことには、まだ〳〵不十分でありました。そこで神武天皇から第十代目の崇神天皇は、皇族のお方々を四方におつかはしになりまして、まだ從つてゐないものを敎へ、導き、どうしても命を奉じないものは、これを征伐せしめられました。これを『四道將軍』と申します。

いはゆる四道將軍とは、孝元天皇の皇子大彥命、大彥命のお子の武淳川別命、開化天皇の皇子彥坐王のお子の丹波道主命、孝靈天皇の皇子吉備津彥命です。天皇は又御子の豐城入彥命を東國へおつかはしになり、これを治めしめられました。この四道將軍や、皇子たちを、方々へおつかはしになりました結果として、天皇の御威光はます〳〵遠方にまで及びました。帝國の領分は大そう廣くなりました。

そんな勢でありましたから、この御代の末には、朝鮮の方からも、天皇のお助けを願つて參りました程で、それで崇神天皇の御事を、『初國知らす天皇』と申し上げました。初めて大日本帝國をお治めになる天皇と申す意味です。

それでもなほ遠く離れた所には、皇室のお手が屆かず、天皇の御德澤に浴する機會を得ずして、熊襲だとか、蝦夷だとか呼ばれた土人が、たくさん住んでをりました。熊襲は西南の、九州地方に、蝦夷は東北の、奥羽地方にゐたのです。この熊襲も、また蝦夷も、天孫降臨の以前からこの國に住んでゐたものどもで、ずっと大昔には、廣い中央の地方にまでも廣がつてゐたのですが、だん〳〵と天皇の御德に從つて、中央に近い所から、次第に日本民族の仲間になつてしまつて、後には日本の兩方の端に、まだ土人のまゝで取り遺されることになつてゐたのです。

## 十三、熊襲と蝦夷（二）

今天孫降臨以前の樣子を考へて見ますと、すでに多くの人々が、各地に住んでをりましたけれども、かれ等はまだ金屬を使ふことを知らないで、石で刄物を作るといふような、



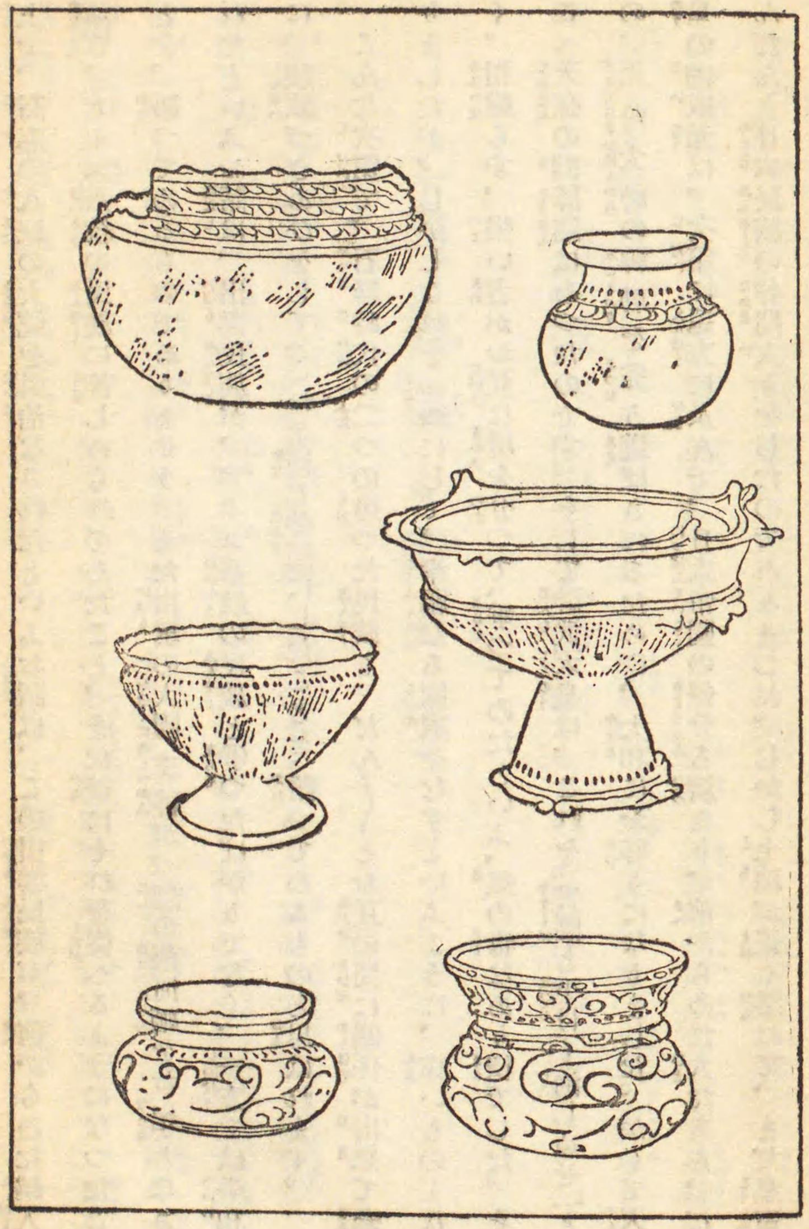
至つて不自由な、開けない生活をしてをりました。それは今も方々の土の中から、石の鏃や、石の斧、石の庖丁、石の刀などが出て來るのでわかります。そんな時代を『石器時代』と申します。

我が國の石器時代には、少くも二つの筋の違つた民族が住んでをりました。一つは今も北海道にゐて、アイヌと呼ばれてゐる人たちと、同じ筋のものでありまして、むかし奥羽地方に住んで、歴史の上で『蝦夷』といはれてゐた人たちも、やはり同じ流れのものでした。かれ等は大そう毛が多いので、毛人ともいはれ、むかし北陸地方にゐて、『越人』などといはれたものも、同じ筋のものでありますが、遠い〳〵大昔には、ひとり東北の奥羽地方や、北陸地方にばかりでなく、關東地方から、本州中部、近畿地方、中國、四國を經て、西南は九州地方のはてにまでも、廣く住んでゐたのでありました。今にそのあとは所々に遺つてをります。かれ等は、この日本の島國へ、一番初めに來て住んでゐたものでありませう。かれ等はまだ農業を知らず、魚を捕つたり、鳥獸を獲つたりして、生活して

ゐましたが、しかし手藝の方は餘程進歩してをりまして、かれ等の使つてゐた土器などには、こゝの挿し繪にあるように、今日の人でも容易に眞似の出來ぬほどの、よほど見事な品がたくさんあります。

今一つの石器時代の住民は、西南は九州地方から、東は四國、中國、近畿地方を經て、本州中部地方にまで廣がつてゐたもので、關東地方にも幾らかそのあとが遺つてをりますが、石器時代には、まだ奥羽地方にまでは及んでをりませんでした。かれ等は後に出雲の地方に盛んになりまして、これに關するお話が、多くこの地方に遺つてをりますから、普通に『出雲民族』などといはれてをりますが、しかしその住んでゐた所が、出雲あたりにのみ限つてゐなかつたことは、その石器時代のあとが、廣く方々に遺つてゐることでわかります。かれ等はアイヌ系統の民族の次ぎに、この島國へ渡つて來ましたもので、だん〳〵と前からゐたこのアイヌ系統の民族を從へましたが、まだ奥羽地方にまでは手が屆かず、こゝには蝦夷が盛んに殖えて來たものと見えます。前に述べた素戔嗚尊が、出雲の簸の川





上で、高志の八岐の大蛇を退治なされたといふお話は、この出雲民族が、前からゐた越人即、アイヌ系統の民族に苦しめられてゐたこと、また後にそれを從へるようになつたことを、語つてゐるものでありませう。また出雲の大國主神が、越の沼河姫をお妃となされたといふお話は、出雲民族が、アイヌ系統の民族と爭つたばかりでなく、一方では平和に、親類づきあひをして、これを同じ仲間にしたことを、語つてゐるものと思はれます。

こんな次第で、石器時代の二つの違つた民族も、だん〳〵とお互の間に關係が出來て參りましたが、しかしこれを一つにして、幸福なる國家をなすといふように、偉いものもなく、相變らず、強い者がお互に境を分つて、爭つてゐたといふ、氣の毒なあり樣でした。そこへ天孫の御降臨はあつたのです。そして神武天皇は、これを「安國と平けく治しめせ」との、天照大神の神勅を完う遊ばされるために、大和にお移りになりました。かくて天皇の御威光は、次第に遠方に及んで、日本帝國の領分も廣まり、前からゐた人たちも、だんだんと日本民族の仲間入りをしたのでありました。しかし土地が遠く離れて、まだ皇室



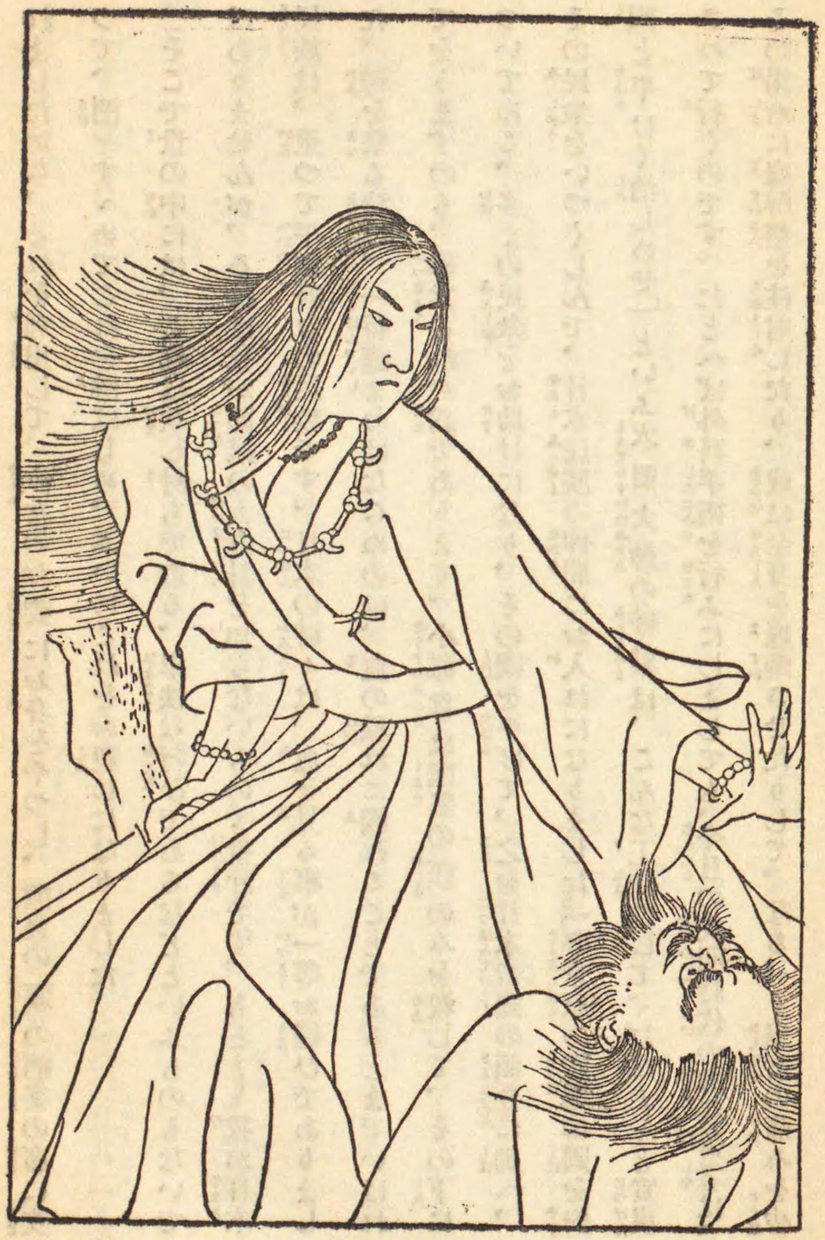
の御惠みの行き屆かない西南の端の、九州地方には熊襲が、また東北の端の奥羽地方などには蝦夷が、もとのまゝに取り遺されてゐたのです。蝦夷が石器時代以來のアイヌ系統の民族であることは、前にすでに述べましたが、熊襲は、人種の上からは、大國主神などと同じく、これも石器時代以來の出雲民族の系統に屬するものであつたと見えます。

## 十四、熊襲と蝦夷（三）

崇神天皇の御代に、天皇の御威光が、廣く遠方にまで及んで、我が日本帝國の領分も、大そう大きくなり、日本民族の仲間も殖えて參りましたので、次ぎの第十一代垂仁天皇の御代には、それらの地方の政治にお力をおつくしになり、農業を御奬勵になつて、國民の幸福の基をお定めになりました。かくてその次ぎの第十二代景行天皇の御代に至つて、日本武尊の、熊襲や蝦夷の御征伐といふようなことがあつて、皇威の大發展が行はれました。

同じ民族であつても、都に近くゐたものは、はやく天皇の御德に從つて、日本民族の仲間に入り、日本帝國の臣民として、幸福な身分となつてをりますが、遠く離れた九州地方の熊襲や、奥羽地方の蝦夷などは、日本民族の仲間入りをしないのみならず、かへつてしばしば人民に害を加へます。これは國家として、困つたものであるばかりでなく、かれ等自身のためにも、まことに氣の毒な次第であるといはねばなりません。そこで景行天皇は、皇子小碓尊に勅して、先づ九州の熊襲をお討たせになりました。教へても、諭しても、どうしても命を奉ぜぬような頑固なものは、これを國家の敵として、兵隊の力をもつてでも、これを從へねばなりません。しかし我が國家の大方針は、敵を滅してその國を奪ふといふのではなく、これを從へて、一方ではかれ等を幸福ならしめ、一方では國家の利益をはかるといふ、いはゆる自他の福利を增進せしめんとするものでありますから、なるべく戰爭を避け、實際やむを得ぬもののみを殺して、他の者を痛めないといふ方法を取りました。されば小碓尊は、この時御年僅にお十六歲の、至つてお可愛らしい少年であらせら





れましたから、それを利用して、少女のお姿にお身をやつし、熊襲の頭の酒宴の席に交つて、酒をすゝめてこれを醉はしめ、ふいにこれをお殺しになりました。

そこで世の中には、これは欺し討ちである、卑怯な行ひであるなどといふものもないではありませんが、それは我が國家の大方針を知らないもの丶批評です。もと〳〵我が日本民族は、至つて平和好きの民族です。日本の神々は、血を見る事が一等お嫌ひでありました。神を祭る時に、一番謹まねばならぬのは、血の穢れに觸れることであるとまでいはれてをりますのも、畢竟これが爲であります。小碓尊は熊襲の頭のみを殺して、その下についてゐる、多くの民衆をお助けになり、その國を平げて、之を日本帝國の領分に加へ、その民衆をいつくしんで、日本民族の仲間にお入れになりました。「豐葦原の瑞穗の國を安國と平けく治しめせ」といふ天照大神の神勅は、こんな工合にして、だん〳〵と實現されて行くのです。たとへば外科手術を行ふにしましても、今日の文明時代の外科醫者は、その場所に麻醉劑を注射したり、或は全身を麻醉させたりして、なるべく患者の痛みを少



くするように、なるべく他に影響を及ぼさぬようにと、心がけるようなものです。ちよつと見ると卑怯なように見えましても、決してさうではありません。これがお惠の軍と申すものです。景行天皇の勅に、「今兵を興すことが少ければ、賊を滅ぼすに足らず、さりとて多く兵を動かすは、これ百姓の害である。願はくは乃の威を借らずして、ゐながらにしてその國を平げたい」とも、「これに示すに威をもつてし、これを懷くるに德をもつてし、兵を煩はさずして、從はしめたい」ともありますのは、まったくこれが爲です。もちろん萬やむを得ぬ時は、戰爭も敢て辭する所ではありませんが、なるべく戰はずして、平定の目的を達したいといふのであります。

熊襲の頭の殺される時に、かれは小碓尊が少年の御身をもつて、たゞお一人で大勢の敵の中に入り、頭をお刺しになつた勇氣に感心しまして、

「西の國には私共よりも強いものは一人もありません。しかるに日本には、私共にも増してお強いお方がおありになる。どうかこれから、日本武尊と仰せられますように」

と申し上げました。『日本武』とは、日本の武勇勝れたお方と申すことです。

## 十五、熊襲と蝦夷（四）

日本武尊は熊襲を御平定になりまして、お歸りになります道々にも、ところ〴〵で、山や、河や、海峽などによつて、人民をなやますものどもをお平げになり、最後に東國の蝦夷を御征伐にお向ひになりました。その御途中に、伊勢の皇大神宮に參拜して、御叔母様の倭姫命にお暇乞ひを申されましたところが、命は神宮の天叢雲劍を御身の護りとして、御授けになり、また別に一つの囊をお與へになりまして、

「もし急なことがあつたなら、この囊をあけて御覽なさい」

と仰せられました。

日本武尊はこの二つの贈り物をお持ちになつて、行く〴〵道筋の從はぬものどもを



從へになり、駿河の國までおいでになりました。ところが、そこの頭が、尊を殺し奉らうとして、鹿狩りをおすゝめして、野原の中に尊をお誘ひ申し、四方から火をつけて燒きたてました。ぐるりに火は燃えてゐます。尊はもはやお遁れになる途もありません。そこで思ひ出されましたのは、倭姫命から贈られた囊、今こそ開くべき急な場合よと、囊の口を解けば、中に火打ちがありました。そこで尊は天叢雲劍を拔いて、御身のまはりの草を薙ぎ拂ひ、また火打ちを打つて火を出し、先の方の草に向ひ火をおつけになりましたところが、その火が盛んに反對の方に燃えて行つて、尊は御無事に危難をお免れになり、かへつて敵の方が燒かれました。このことがあつてから、天叢雲劍を『草薙劍』と申し、その野火のあつた所を燒津と申します。また向ひ火と申すことは、今も大きな山火事などの場合に、應用されてゐるところで、向う側につけた火は、切り拂つた場所から先へ先へと、だん〴〵盛んに燃えて行きまして、こちらは無難になるのです。

尊の御東征中の御難は、こればかりではありませんでした。相模の三浦半島の走水から、

房總半島の方へお渡りになります時に、大そう海が荒れて、お船があぶなく沈没しそうになりました。この時お妃の弟橘媛が、これは海の神が尊を取らうとしてをられるのであらうと、尊に代つて海へおはひりになりました。それで波風も靜まり、お船は無事に向う岸につきました。

かくいろ〳〵の危難を冒されまして、尊はめでたく蝦夷御平定の目的をお遂げになり、その外、所々の從はぬものどもをもお從へになりまして、お歸り途に、上野の碓氷峠にお登りになりますと、東の方に關東平野が廣々と開けてをります。尊はこれを御覽になりますにつけても、お妃の弟橘媛が、走水の海で尊の御身代りとして、海に沈まれましたことを思ひ起されまして、思はず「吾妻はや」と御歎きなさいましたので、それから東國のことを、『吾妻』といふようになつたと申し傳へてをります。一説には、このことを、相模の足柄の坂でのことだとも傳へてゐます。

その後も尊は、お供の吉備武彦を越の國へおつかはしになつて、その樣子を御調べさせ



になり、また信濃では御坂の惡神をお平げになり、尾張に到つて宮簀媛といふお方をお妃として、暫くそこに御逗留の後、近江の伊吹山に惡神ありとお聞きになつて、草薙劒を宮簀媛にお預けになつたまゝ、その山へおいでになりましたが、中途で御病氣にかゝり、伊勢の能褒野でお崩れになりました。そこで草薙劒は、そのまゝ尾張に止まつて、今に熱田神宮にお祭り申すことになつてゐるのです。

日本武尊の御功業は、非常に大きなものでありまして、西南は熊襲から、東北は蝦夷まで、その間においても、從はぬものどもをそれ〴〵お從へになりまして、我が帝國の領分は、これがために大そう廣くなり、天皇の御威光は、ます〳〵御盛んになりました。

しかし我が日本の盛んになりましたのは、實はたゞこの景行天皇の皇子たる日本武尊の、お一人のお力ばかりでありません。その前にも、またその後にも、御代々の天皇は、いづれも『日本の武』とも申し上ぐべき程の、武勇の勝れた、お德の高いお方々でありました。そして常に德をもつて人民をお懷けになり、やむを得ぬ場合には、威をもつてこれを

お從へになりましたので、その御代々の御功業が、積り積つて、帝國はます〳〵盛んになつて來たのです。その中でも、景行天皇の皇子たる日本武尊の御功業が、殊に著しかつたので、そればかりが特に名高くなつてゐるのでありませう。

かくて第二十一代雄略天皇の御代の頃には、東の方では、毛人卽、蝦夷の國を五十五箇國、西の方では、熊襲などの多くの夷を六十六箇國、また海を渡つては、朝鮮半島の九十五箇國をお從へになるといふほどの、御盛んな勢になつて參りました。その朝鮮半島のことは次ぎに申しませう。

## 十六、朝鮮半島諸國の服屬

今は帝國の一部となつてゐる朝鮮半島にも、大昔にはたくさんの國がありました。その南の方は、馬韓、弁辰、秦韓の三つに分れて、それを三韓と申しましたが、そのうちでも



名の判つてゐるものが、馬韓五十四國、これは半島の西南部に、弁辰十二國、秦韓十二國、これは半島の東南部に、三韓合せて七十八箇國ありました。またその北には高麗といふ強い國があり、その外にも、まだ多くの國々がありまして、天孫降臨以前の日本内地と同じように、統一がなくて、お互に爭うてをりました。その中でも秦韓人は、支那の秦といふ時代に移住した支那人の末で、その秦韓の中の新羅といふ國が、だん〳〵強くなり、次第に近所の國を併合します。また馬韓の中の百濟といふ國も、だん〳〵強くなつて、近所の國々を併合しまして、朝鮮半島には、北に高麗、東南に新羅、西南に百濟と、三の強い國が、鼎の足のように、並んでゐるといふあり樣となりました。

もちろん、その外にも、まだどれにもつかない小さい國が、幾らもありました。これ等の小さい國が、新羅の壓迫に困つて、助けを我が日本に求めて參りました。これは第十代崇神天皇の御代の末で、まもなく天皇お崩れになりましたので、次ぎの垂仁天皇は、兵をつかはして、これをお救ひになりました。これからこれ等の諸小國は、我が國に屬するこ

とになり、後に我が國からは、日本府といふ役所を置いて、これをお治めになることになりました。これを任那と申します。みまなとは、崇神天皇の御名を御間城入彦と申し上げましたので、その御名を記念して、その小さい國々を一つにしたものにつけた名だと申すことであります。

かくて朝鮮には、新羅、百濟、高麗の三大國と、任那の諸小國とがありましたが、その中にも、新羅が一番我が國に近く、自然何かと關係が起つて參ります。

もと〳〵朝鮮半島の住民の中には、我が出雲民族などと同じ流れのものが多く、國はそれぞれ別々に分れてゐても、人種の上からいへば、お互に一續きのもので、その間には、ほとんど、區別がありませんでした。そこで我が內地にあつた多くの小さい國々が、次第に皇室の御德澤によつて、統一されて參りますと、自然とその引き續きとして、朝鮮半島の中の國々も、次ぎには、やはり日本と一つになるべき筈のものでしたが、果して任那の諸小國が、先づもつて我が國に從つて參りましたのです。しかるに一番我が國に近い新羅



の國は、その國の勢の盛んなのにまかせて、かへつてとき〴〵それを邪魔するばかりでなく、狹い海一つを挾んだばかりの、我が九州地方にゐた熊襲などは、天皇のまします大和よりも、かへつて新羅の方が近いので、ついそれに引かされて、自然我が國から離れようとするおそれがないではありません。

果して第十四代仲哀天皇の御代に、熊襲が叛きました。そこで天皇は、皇后と御共々に、御自身これを御征伐にお出かけになりましたが、熊襲の勢强くて、容易に平がないうちに、天皇は筑前の香椎宮でお崩れになりました。皇后は神功皇后と申し上げて、開化天皇の御曾孫の、息長宿禰王の御子であらせられます。御生れつき御聰明で、天皇が熊襲御征伐中にお崩れになりましたについても、さうお力を落しておしまひになるといふようなことはなく、どこまでも天皇の御志をついで、御國の爲に熊襲を平げなければならぬと、をゝしくも御決心なさいました。しかし熊襲には、近い所に、新羅といふ强い國がついてをりますので、幸ひに一旦從ひましたとしても、また、いつ再び叛くかも知れません。これは更にそ

の大本に遡つて、新羅をまでもお從へにならねばならぬと、天皇崩御の御悲しみの中にも、深く後のことまでお考へになりました。そこでお供の大臣武内宿禰と御相談の上、まづ熊襲を平げられまして、更に御自身男の御よそほひをなされ、海を渡つて遠く新羅を討ちになりました。その勢大そう御盛んで、ふいに新羅の都におし寄せて參りましたものですから、新羅王も大いに驚いて、「かねて東の方には日本といふ神の國があり、そこには尊い君があつて、天皇と申すと聞いてゐたが、これはその神兵であらう、到底抵抗することは出來ぬ」と、忽ち白旗をかゝげて降參しました。そして、「東から出る日が、西から出るようにでもならばいざ知らず、たとひアリナレ川の水が逆さに流れ、河原の石が天に上つて星となるようなことがあらうとも、いつまでもお從ひ申して、毎年の貢を怠りませぬ」と、堅い御約束を申し上げました。その後百濟もこれを聞いて我が國に降り、高麗もまた從つて參りましたので、九州の熊襲も、再び叛くことがなくなりました。かくして雄略天皇の御代の頃には、前に申したように、朝鮮半島内の九十五國までが、我が國に

從ふといふような、盛んなあり樣となつたのであります。

## 十七、外人の渡來と外國文化の輸入（一）

私共日本民族は、天孫降臨の前からこの國にゐた多くの民衆が、天孫民族と一しよになつて出來上つたものでありますが、その外に外國から渡つて來て、同じ仲間になつた者も少くないといふことを、前に述べて置きました。その外國といふのは、おもに支那や朝鮮でありまして、中にも支那は古くから國が開け、文化が大そう進んだ國でありました。また朝鮮も、土地が支那に近いものですから、早くから支那人が入り込んだり、支那と交通したりして、支那の文化を傳へてをりましたので、その支那人や朝鮮人の渡來によつて、その進んだ文化は、盛んに我が國に傳はつて參りました。

支那人で一番古く朝鮮半島に移住したのは、前に申した秦韓人で、これは支那では秦と



いふ時代の人々だといはれてをりますが、その後今から二千年ばかり前、秦が滅んで、漢の時代となり、その漢の武帝といふ偉い天子の時に、朝鮮を伐つて、盛んに漢人の移住がありました。

この人たちは、朝鮮半島の西北部にある、大同江の附近、樂浪といふ所におもに住んでをりましたので、今にその地の古い墓の中から、漢時代の文化を見るべき、立派な品物がたくさん掘り出されまして、近ごろ日本の大學の學者たちが、熱心にそれを研究してをります。卽、朝鮮には、秦人と、漢人と、同じ支那人でも、時代が違ひ、自然文化も違つた二通りの人たちが、秦韓と、樂浪とに、移住してゐたのです。

その秦人のゐた秦韓の地は、後に新羅の國となつた所ですが、こゝからは一番早く日本へ移住民がありました。天日槍のお話は、そのことを語つてゐるものであります。

それは、むかし新羅の王子の天日槍といふ人が、新羅から、我が國に渡つて來たといふお話です。時代は天孫降臨以前のことで、その頃出雲の地方を中心として、すでに大國の

主となつてをられたといふ大國主神と、播磨の國で土地を爭つて、度々戰爭をしたといふのでありますから、相當大勢の人民を連れて、移住して來たものと見えます。後に日槍は、近畿地方をあちこちと廻つた末に、但馬の國に落ちつき、土地の人を妻として、子孫がそこで繁昌しました。その一しよに來た仲間のものが、方々に住みついたことは、申すまでもありますまい。近江の國の鏡谷で、古代の朝鮮風の陶器を燒いてゐた職人のごときも、この仲間の子孫だといはれてゐます。又第十一代垂仁天皇の御代に、常世國といふ、遠い〳〵國へ行つて、橘を取つて來たといふ田道間守も、この日槍の玄孫(孫の孫)であつたと申します。又新羅を御征伐になりました神功皇后の御母君は、その田道間守の姪に當らせられる御方です。されば皇后が熊襲をお從へになるについて、先づその騷ぎの大本になる、新羅を從へることが必要だとお考へになつたのも、御母君の御先祖の關係から、新羅のことをよく御承知であつた爲でありませう。もつとも新羅といふ國の出來たのは、天孫降臨よりもはるかに後のことでありますから、大國主神と戰爭したといふ天日槍が、その頃にはま



だ國の出來てゐない筈の、新羅の王子だといふわけはありません。これは後に新羅の國になつた秦韓の人のことを、後の國の名で語り傳へたのでありませう。しからばその秦韓人の血を御母方にお受けになつた神功皇后が、その新羅をお從へになつたのは、新羅の爲に併合せられた秦韓人の國を、お取り返しになつたといふわけにもなるのであります。

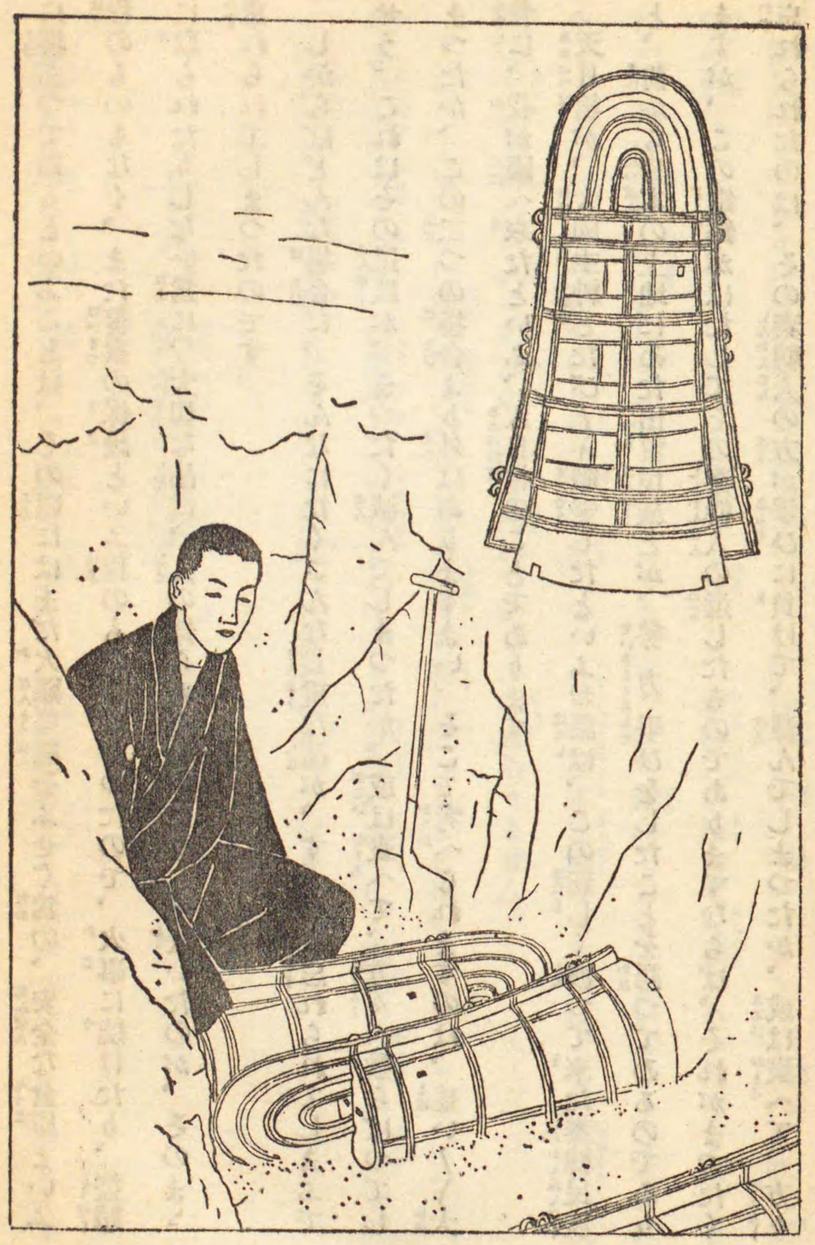
## 十八、外人の渡來と外國文化の輸入（二）

この秦韓人の子孫が遺したものでありませうか、近畿地方から、本州中部、中國、四國など、日本の中央部の土の中には、『銅鐸』といつて、こゝの挿し繪で見るような、支那の大昔の釣り鐘の形をした、青銅で作つた見事なものが、たくさんに埋まつてゐるのであります。この繪は大正十三年の末に、三河の國から、三箇一しよに掘り出されたところを寫したのですが、時としては十幾個も、一しよに出ることがありまして、明治以來六十年ほ

どの間に、土地の開墾や、道路の工事などで、たま〳〵掘り出されたものだけでも、百箇以上もありませう。そしてそれは遠い昔の時代から、引き續き掘り出されてゐるのでありますから、これまでに掘り出された數がどれだけ多かつたか、又まだ掘り出されずに、土の中に殘つてゐるものがどれだけ多くありますか、ほとんど想像も出來ぬほどに、たくさんに埋まつてゐるのであります。しかもその品は、千何百年も前の日本人が、すでに一向知らなかつたほどの古いものなのです。されぱたま〳〵それを掘り出しでもしまするとそれがいつの時代に、どんな人が使つたものだか、又何に使つたものだかわからず、とても日本人のものではなからう、外國のものであらうといふようなことで、天竺(印度)の塔の屋根の隅にぶら下げた、鐸であらうなどといつてをりました程です。

しからばなぜそんなにたくさんに、そんな貴重な品が、そこにも、こゝにも、土の中に埋まつてゐるのでせう。これは大昔にこの銅鐸を持つてゐた民族が、近畿地方から、その附近の國々に、大そうたくさん住んでをつたためであります。又それがたくさんに土の中





に埋まつてゐるといふことは、その頃にはまだ火難盗難をふせぐ爲の、安全な倉庫といふ程のものもなく、また警察の保護といふ程のものもなかつたので、火事に燒けたり、盗賊に取られたりしない爲に、大切な品は、人の知らぬ土の中に隱して置いたのが、そのまゝ忘れられてしまつたのです。

しからばどんな場合に、そんなにたくさんな貴重な品が、すつかり忘れられてしまふでせう。これはその民族が、まつたく滅んでしまつたか、或は衰へて、方々へ散らばつてしまつたか、この二つの場合より外はありますまい。そこで考へられますのは、遠い〳〵大昔に、我が國へ來たといふ、天日槍のことであります。

天日槍が、大國主神とたび〳〵戰爭したといふお話は、この新しく渡つて來た秦韓民族と、前から日本の土地にゐた出雲民族とが、勢力爭ひをしたことを語つてゐるのでありますが、この銅鐸がはたしてその秦韓人の遺したものでありますならば、それがまつたく忘れられたのは、その秦韓人の方が爭ひに負けて、滅んでしまつたか、或は衰へて、方々



へ散らばつてしまつたかの爲でありませう。しかし土の中に埋めたまゝに、忘れられた銅鐸の數だけでも、そんなにたくさんある程にも、秦韓人が盛んな民族であつたならば、それがいかに勢力爭ひに負けたとしましても、すつかり滅んでしまふといふようなことはありますまい。いづれその子孫は後に遺つて、私共日本民族のうちには、この大昔の支那の文化を傳へた人々の血が、必ず流れてゐるに相違ありません。

このことは、なほ後に秦人のことをお話する時に述べることにしまして、こゝではたゞ、我が日本の大昔には、近畿地方を中心として、その近所の國々に、支那の大昔の文化を傳へた民族が、甚だ多數にをつたことを述べるだけに止めておきませう。

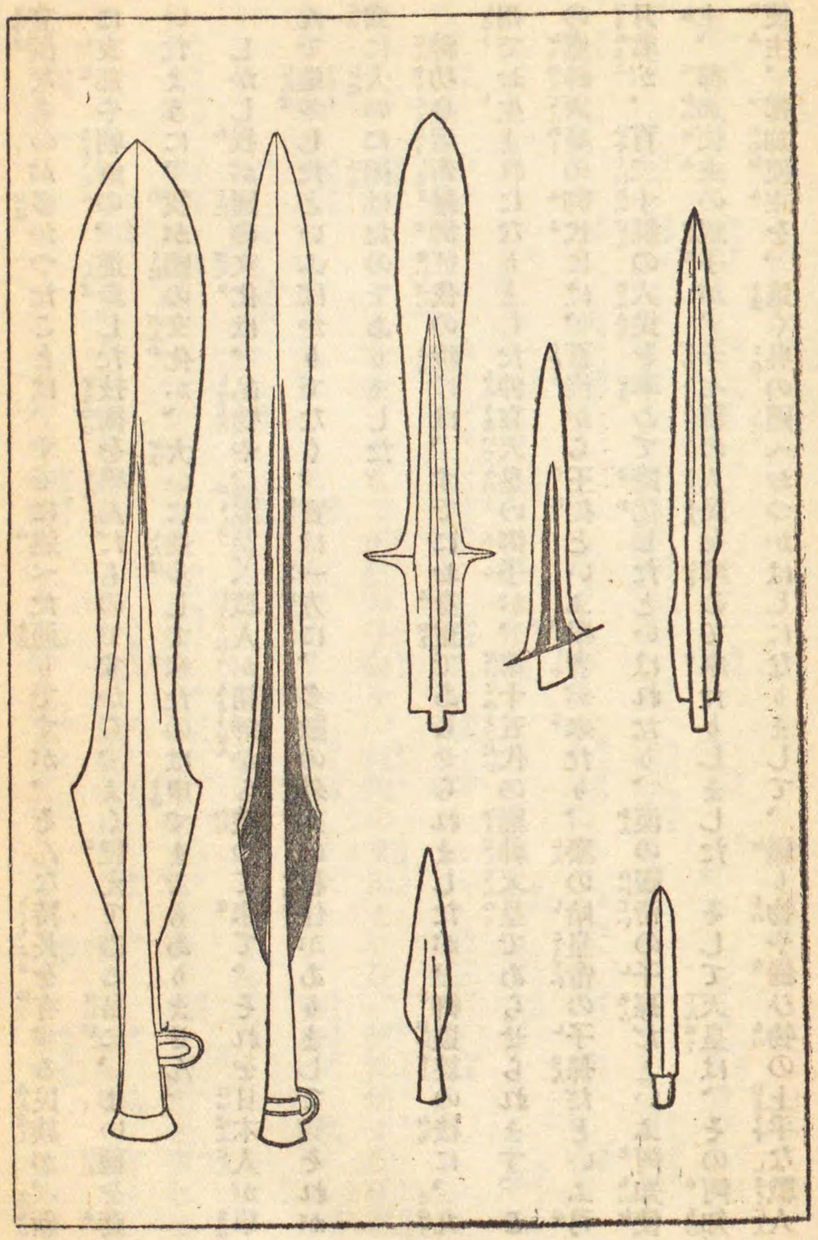
## 十九、外人の渡來と外國文化の輸入（三）

秦韓人は早く日本へ渡つて、近畿地方からその近所の國々に、廣がつたようであります

か、漢人が朝鮮の大同江の附近の、樂浪の地方に移住するようになりましてから、九州地方の人たちは、これと交通して、盛んに漢代の文化を傳へました。中には直接、漢の本國へ交通して、漢の天子から、その地方の王の位を與へられた有力者もありました。漢が滅んで、魏といふ國の時代になりまして、朝鮮の樂浪は、帶方と改まりましたが、我が九州地方の有力者は、引き續きこれと交通しまして、その文化を傳へましたので、漢や魏の時代の鏡や、刀劍などが、多く日本へ渡つて來ました。そして九州あたりでは、その時代の支那の銅の劍や、銅の鉾にならつて、自分で日本風のものを作る程にまで、鑄物の技術も進歩しました。かうして石器時代から、だん〳〵金の器の時代に移つて來たのです。

その後神功皇后が、新羅や百濟をお從へになり、高麗もまた交通して來るようになりましてからは、これ等の國々から、いろ〳〵の品物を送つて來ましたり、又いろ〳〵の學者や、職人が渡つて參りまして、我が國の文化が大いに開けて參りました。もと〳〵日本には、手藝が上手で、その方面に頭の勝れたものが多く、大昔の石器時代の土器に、非常に





立派なものが多かつたことは、すでに述べた通りですが、そんな特長を有する民族が、新に支那や朝鮮の、進歩した技術を學んだものですから、よく肥えてゐる島に、よい種を蒔いたように、我が國の文化が、大いに進歩して來たのは申すまでもありません。

しかし我が國の文化は、品物や、學者や、職人が朝鮮から渡つて來て、それを日本人が學んで進歩したといふばかりでなく、實は一方に、多數の外人の移住がありまして、それが爲に大いに開けたのでありました。

神功皇后新羅御征伐の時には、すでにお身重であらせられましたが、御凱旋の後に、九州でお生まれになりました仲哀天皇の御子が、第十五代の應神天皇であらせられます。この應神天皇の御代には、百濟から王仁といふ學者が來たり、秦の始皇帝の子孫だといふ弓月君が、百二十縣の人民を率ゐて歸化したといはれたり、漢の靈帝の子孫だといふ阿知使主、都加使主の親子が、十七縣の人民を率ゐて來たりしました。そして天皇は、その阿知使主、都加使主を、遠く吳の國へおつかはしになりまして、織り物や縫ひ物の上手な職人



を、お招きになりました。

王仁も、その先祖は支那人でありましたが、久しく百濟へ來てゐまして、百濟の王から我が國にお送り申したのです。そこで應神天皇の皇子稚郎子は、これを師として漢文學をお學びになり、大そう御上達なさいました。これから日本には、文字の道が開けて參りました。そしてこの王仁の子孫は、河内の國に住みつきまして、永く漢文學をもつて朝廷にお仕へしました。また阿知使主の子孫も、同じく漢文學をもつて朝廷にお仕へしましたが、これは大和にをりました。そこで王仁の子孫を、河内の文氏といひ、阿知使主の子孫を、大和の文氏といひました。この外にもいろ〳〵の學者が、おひ〳〵朝鮮から渡つて參りまして、我が國の文化が、大いに開けたことは申すまでもありません。

弓月君は秦氏の先祖です。かれは秦の始皇帝の子孫だといふことで、氏を『秦』と書きますが、それを日本で『はた』と讀むのは、この一類の歸化人は、機を織つて織り物を作ることが多かつたからでありませう。一說に、その織り物がやはらかで、大そう肌觸りがよろし

かつたから、それで『はだ』氏といふのだといひますが、どうも實らしくありません。

この一類の人々は、何しろ百二十縣の多數で渡來したといはれる程で、大團體の移住でありました。もとは支那人でも、久しく朝鮮に來て住んでをつたものらしく、その我が國に渡つて來る時に、新羅人が邪魔をしたといひますから、實は古くから朝鮮へ來てゐた、秦韓人の仲間であつたでありませう。それを我が國では、ひつくるめて秦人と申しました。

## 二十、外人の渡來と外國文化の輸入（四）

この秦人は、そんなに多數でありながら、どうしたわけか、後には諸國に散らばつて、有力者の爲に追ひ使はれるといふような、氣の毒な身分になつてしまひました。それを第二十一代の帝雄略天皇がお救ひになり、弓月君の子孫の秦酒公をその頭として、いろいろとお世話をなさいましたので、秦人はこれから再び盛んなものとなりました。



もと百二十縣ともいはれた程の多數の秦人が、どうしてその統一を失ひ、諸國に散らばつて、奴隷のような氣の毒な身分に落ちてしまつたのでありませう。これはきつと歸化人だといふところから、他の民族に壓迫せられて、爭ひに負けた結果であつたとしか思はれません。しかし我が天孫民族は、けつして異つた民族を虐待するようなことはありません。土人でも、歸化人でも、皆これをいつくしんで、同じ仲間にしてしまつたものです。ことに昔は人口が少く、土地が割りあひに廣かつたのと、外國の文化を輸入して、我が國を進歩させようとの方針とから、むしろ歸化人を、大いに歡迎したのでありました。そこで思ひ合されますのは、前にお話した銅鐸のことです。この支那文化に關係ある品を持つてゐた人たちは、その數が大そう多かつたにかゝはらず、後にそれが滅んでしまつたか、衰へて方々へ散らばつてしまつたかして、その貴重な品を土の中に埋めたまゝに、忘れてしまつたのでありました。そしてこの銅鐸は、天日槍のお話にあるような、古く我が國に移住した、秦韓人の持つてゐたものだと思はれることと、考へ合せて見ますと、大昔に銅鐸を

持つてをつた秦韓人が、卽、この秦人のことであらうと思はれます。その秦人が、出雲民族との爭ひに負けて、方々へ散らばつて、奴隷のような氣の毒な身分になりましたから、たとひその子孫はたくさん方々に遺つてをりましても、先祖が土の中にしまつて置いた銅鐸のことは、いつの間にか忘れてしまつたのだと解釋しますと、始めて理窟がよくわかります。もしほんとうに秦人が、應神天皇の御代に、百二十縣といふような、大きな團體で移住して來たのでありましたなら、同じ頃に來た阿知使主の十七縣の仲間が、引き續き我が國で榮えてをるのとは事變つて、久しからぬうちに、ことゞく衰へてしまつたといふことも、實際理窟の通らない話ではありませんか。されば秦人が、應神天皇の御代にはじめて來たといふのは間違ひで、かれ等は遠い大昔からこの國に來てゐて、一たん落伍者となり、奴隷の身分となつて方々へ散らばつてゐたのを、應神天皇の御代に來た弓月君の子孫の酒公が、同じ秦の國の人で、しかもその始皇帝の子孫だといふ緣故で、後にその頭となつたといふようなことから、その下についた秦人も、その先祖の弓月君と、一しよに來たと



いふことに、誤り傳へたのでありませう。

我が國に於ける秦人の數は大そう多く、雄略天皇がそのお世話をなさつた頃に調べましたら、九十二の組に分れて、一萬八千餘人もあり、第二十九代欽明天皇の御代の頃には、七千五十三戸で、その頃の日本の總戸數に比べると、少くも二十八分の一はありました。そしてそれが諸國に分れ住んで、皆日本民族の仲間になつてしまつたのです。

## 二十一、外人の渡來と外國文化の輸入（五）

應神天皇の御代に渡來した阿知使主の仲間は、これももとは支那人ではありますが、朝鮮の大同江附近、卽、漢の時代の樂浪、魏の時代の帶方から來たもので、古くこゝに移住してゐた漢人の子孫でありませう。我が國ではこれを、弓月君の仲間の秦人に對して、漢人といつてゐます。文字に『漢人』と書くのは、支那漢代の人の移住民の子孫だからであ

りませうが、これを我が國で『あやびと』といつたのは、かれ等がいろ〳〵の模様のついた織り物を織つたためであります。古く我が國では、模様のことをあやといつたのです。つまり秦人も、漢人も、もとは我が國で、おもに織り物工業を職としてゐたものでありませう。

漢人の仲間は、秦人が衰へて、方々に散らばつたのとは樣子が違つて、都に近い大和の國の、高市郡にまとまつて住んでをりました。今から千百年ばかり前までも、高市郡の住民は、十中の八九まで、皆この仲間であつたといふほどにも、かれ等はこゝで繁昌したのでした。しかしこれ等の多數の人々も、いつの間にか皆日本民族の仲間になり、外の人たちと、少しも區別のないものになつてしまつてゐるのです。

高市郡の中では、飛鳥が漢人の中心地でありました。そしてこゝが、久しく我が國に於ける文化の起原地となりました。後に佛法が傳はつて來ました時にも、まづこゝに立派な寺が出來ます。自然政治の上にも、社會の上にも、勢力を有することとなり、おしまひに



は、これまで御代毎に、大抵場所が變つてをつた都までが、この飛鳥に極つてしまふといふ程の、勢となりました。

漢人の頭なる阿知使主、都加使主が、文學をもつて朝廷に仕へて、その子孫は文氏として、王仁の子孫と共に、代々その職をついだこと、又この二人が、應神天皇の御代に、吳の國へお使ひして、直接支那本國から、織り物、縫ひ物の職人を連れて來たことは、前に述べましたが、雄略天皇の御代に、同じく吳の國にお使ひして、同じく織り物縫ひ物の職人を連れて來た、檜隈博德、身狹青等も、やはり高市郡の漢人でした。後に第三十三代推古天皇の御代に、聖德太子のお指し圖で、支那へ留學しました僧侶や學生等も、やはり皆この漢人の仲間でした。

吳の國とは支那のことです。このころ支那は南北の二つの國に分れてゐまして、我が國から使ひの參りましたのは、その南朝の方でした。この地方は、昔の吳といふ國のあつたところですから、それで文字には『吳』と書き、國語では、くれといつてゐたのです。『くれ』

とは『暮』のことで、我が日本は東にあつて日出國、支那は西にあつて日沒國、日出は卽、朝で、日沒は暮ですから、それで支那を、暮の方の國といふ意味で、『くれ』といつたのです。推古天皇の御代に、支那へおつかはしになつた國書に、「日出づる處の天子、書を日沒る處の天子にいたす、つゝがなきや」とお書きになつたのは、これがためでありました。わが國を日本と申すのも、東の國、卽、日の本の國といふことなのです。

その『くれ』の國、卽、支那は、大そう早くから文化の開けた國でしたから、直接これと交通するようになつてからは、これまで百濟や、新羅の取りつぎで、その文化を輸入してゐたのとは違つて、その本家本元から、すぐにこれを傳へるようになり、我が國の文化は大いに進んで參りました。もつともこれまでにも、九州あたりの人々が、朝鮮へ移住してゐる漢人等と貿易したり、直接支那本國へ行つたり、また支那人がこちらへ來たりしたことはたび〳〵ありましたが、我が國として、直接支那へ使ひをおつかはしになり、國と國との交通の開けたのは、應神天皇の御代が初めで、それはおもに大和の漢人によつて行



はれたのでした。卽、漢人は、我が國に於ける支那文化のおもなる輸入者といつてよいのです。なほこのことは、後に聖德太子のお話の時に、くはしく述べませう。

## 二十二、外人の渡來と外國文化の輸入（六）

かく漢人は、文學をもつて朝廷に仕へ、また支那文化を輸入したばかりでなく、一方にはまた兵士として、久しく勢力を持つてをりました。

我が國の軍隊は、大昔には大伴氏、久米氏を頭として、中にも久米部の兵士が一番有力でありました。これは神武天皇が、九州からお連れになつたもので、熊襲などと同じ民族のものであつたでありませう。天皇大和平野御平定の後には、饒速日命の子孫の物部氏が、宮中をお護りする近衞のお役をつとめて、大伴氏と物部氏とが、相並んで久しく軍隊の頭となりましたが、だん〳〵國が大きくなり、今までの兵隊だけでは足りなくなりま

したので、雄略天皇の御代に、蝦夷を徵發して、その不足をお補ひになりました。これを佐伯部と申します。かく熊襲でも、蝦夷でも、皆忠勇なる軍人として、國家の爲に御用をつとめたものでした。そしてこれ等の軍隊と並んで、漢人等もまた、秦人とともに、兵士として御用をつとめたのですが、その中にも漢人は、都近くに大勢まとまつて住んでゐたのでしたから、なか〳〵勢力がありまして、後には朝廷でも、お困りになる程の盛んなものになりました。次ぎにお話する大臣蘇我氏のわがまゝのごときも、そのうしろに、この飛鳥の漢人の勢力がついてゐた爲であります。

秦人、漢人の外にも、百濟、新羅、高麗などの朝鮮人や、その外の支那人なども、多く我が國に歸化して參りました。我が國では、これ等の人たちを歡迎して、土地を與へてお住ませになりましたから、百濟郡、新羅郡、高麗郡などと、これ等の人たちばかりの郡も、方々に出來ますし、もちろん、歸化人ばかりの村も、たくさんありました。その數がどんなに多かつたかといふことは、今から千年あまり前に、都に近い山城、大和、河内、和泉、



攝津の五箇國の、有名な人々の家柄を調べましたところが、そのころの名高い家が千百八十二氏のうちで、三百七十三氏は、歸化人の子孫であつたのでもわかりませう。卽、總數の三分の一にも近い程の、多數の歸化人があつたのです。その中でも、一番早くから我が國に渡つて來て、その數も多かつたのは、秦人と漢人とでありますが、これはその前に、支那から朝鮮へ來てをつた秦韓地方の秦人や、大同江附近の漢人が、そのまゝ我が國へ移つて來たのでありますから、もとは支那人であつても、もう朝鮮人になつてゐたといつてもよろしいのです。そしてそれらの人々は、たゞ家柄が支那人だ、朝鮮人だといふだけで、皆いつの間にか、日本民族になつてしまひ、その本國の文化は、皆日本民族の文化となつてしまつたのです。

つまり蝦夷だ、熊襲だ、歸化人だなどといつても、皆同じく日本民族の仲間でありまして、我が日本民族は、決して異つた民族を毛嫌ひし、これを排斥するようなことはなく、皆一樣に、暖い懷に抱き込んで、同じ仲間にしてしまつたのです。そして皆、忠良なる

帝國臣民となつてしまつたのです。

## 二十三、大臣と大連

昔は家柄によつて、職業がきまつてをりまして、神を祭る家は中臣氏、忌部氏、軍隊を率ゐる家は大伴氏、物部氏といふように、その外、玉を造つたり、弓を造つたり、機を織つたりする職人などまで、それ〴〵家がきまつてをりました。その中にも、軍隊の頭であるところの大伴氏と、物部氏とが、自然に最も勢力がありまして、國を護り、朝廷の御政治をお助けしてをりましたが、一方では皇族から分れ出て、政治にあづかる有力な家も、だん〴〵出來て參りました。崇神天皇の御代に、四方へお使ひして、從はぬものを平げた四道將軍は、皆皇族のお方々でした。神功皇后のお伴をして、新羅を討つた武内宿禰も、孝元天皇の御子孫でした。また地方では國造、縣主などといふのがありまして、それぞ

武内宿禰

れその地方を領して、朝廷にお仕へ申してをりましたが、その中には、土人の有力者がそれに任ぜられたのもあれば、また皇族から分れ出て、地方を領する家もたくさんありました。

皇族から分れ出た家の中では、武内宿禰の子孫が、最も有力でありました。何しろ宿禰は、新羅征伐以來引き續き朝廷の御政治にあづかり、殊に應神天皇、仁德天皇の御代の頃までも長生きをしまして、その大勢の子たちも、それ〴〵立派な身分となり、仁德天皇の皇后は、その孫娘に當るお方であり、そのお子はお三人まで、天皇の御位にお即きになつたといふ程の、えらい勢でありましたから、自然に勢力がその一族に集り、舊家の大伴氏、物部氏と並んで、共々に朝廷の御政治を、掌る家となつたのです。その宿禰の子孫の多い中でも、蘇我氏が後には一番勢力を得まして、蘇我稻目、その子の馬子、孫の蝦夷など、引き續き『大臣』となりました。昔は家柄によつて、臣とか連とか、いろ〴〵のとなへがありましたが、武内宿禰の一族は、その臣の方で、臣の中でも一番上にあつて、朝廷の御



政治にあづかるのが『大臣』です。この一族に對して、大伴氏、物部氏などは連といふ方で、そのうちから『大連』が出る。政治はこの大臣と大連とが掌ることとなつたのです。

かくて大伴、物部、蘇我の三氏が、鼎の足のように、相並んで、久しく勢力を有してをりましたが、第二十六代繼體天皇の御代に、大連物部麁鹿火は、九州の豪族筑紫國造磐井が、新羅と結んで獨立しようとしたのを平げて、大きな手柄を立てたのに反して、同じ大連の大伴金村は、朝鮮の政治の指導よろしきを得なかつた責任を負うて、退隱しましたので、大連家の方では、大伴氏が勢力を失ひ、物部大連と、蘇我大臣とばかりが、專ら政治を掌るようになりました。さあかうなると兩雄並び立たずで、お互に權力爭ひをして、なか〴〵面倒なことになつて參ります。

## 二十四、佛教の傳來

物部の大連と蘇我の大臣とが、お互に下らず、權力爭ひをしてゐる時に、たま〳〵佛教が百濟から日本へ渡つて參りました。

佛教はもと印度で起つた宗教で、支那から、朝鮮へと、順々に傳はつて來たのでしたが、日本では、支那から歸化して來た人の中に、勝手にこれを信仰してゐるのがあつたくらゐで、まだ一般には、一向そんな宗教のあることを知らないでをりましたのです。

もと〳〵日本では、天津神、國津神をお祭りして、上は天皇を始め奉り、下一般民衆に至るまで、幸を求めるのにも、禍を避けるのにも、みなこの神々にお祈りするのでありました。天皇の御政治を『まつりごと』と申すのも、天皇が神をお祭りなされて、そのおぼし召しのまゝに、國をお治めになるといふことなので、卽、祭政一致と申すことであります。神武天皇が大和平野を御平定になり、天皇の御位につかれまして後に、鳥見の山中に御先祖の天津神をお祭り遊ばされて、その御恩を謝し、その御保護をお願ひになりましたのも、これがためです。そこへたま〳〵佛教が傳はつて來たのでありました。

百濟の使者佛像を奉る

第二十九代欽明天皇の御代の頃は、百濟は聖明王といふ王の時代でしたが、北には高麗といふ強い國があり、東にも新羅がだん〳〵強くなつて來まして、次第に任那の諸小國を併合し、しきりに百濟にせまつて參ります。百濟もこれには困つて、どうか日本のお助けを受けて、それでその國を保たうと、骨を折つてをる時でした。さればこの聖明王は、もとから熱心な佛教信者でありましたから、かねて我が天皇の御爲に、一丈六尺の佛像を造つて、天皇の御幸福や、日本の屬國たる朝鮮の平和を祈つた程でありましたが、自分で佛を祭るばかりでなく、天皇御自身にもこれをお祭りになりますようにと、わざ〳〵使ひをつかはして、佛像や經文や、その外佛を祭る道具などを、さしあげて參りましたのです。

しかしこれは我が國としては、初めてのことでありますから、受けてよいか、どうかといふことに、天皇もお迷ひになり、諸臣の意見をお問ひになりました。この時大連は物部尾輿、大臣は蘇我稲目で、蘇我氏の方は、これまでも外國の事にも關係し、歸化人等とも親しみが多く、自然外國の樣子をも知つてをりましたものですから、稲目は早速、「それは



お受けになつて、お祭りなさるがおよろしうございませう」と申しあげました。ところが物部氏の方は、守舊派ともいふべき方で、なんでもこれまで通りで、よくやつて行かうといふのでありましたから、昔から神を祭る家筋の、中臣勝海とともに、熱心にこれに反對しました。そこで天皇は、大臣稲目のお願ひのまゝに、これを稲目にお與へになり、稲目は自分の家を寺として、その佛像を祭りました。これは我が國の寺の初めで、場所は漢人の根據地の飛鳥の附近でした。

物部氏、中臣氏等は、もちろん、佛教に反對いたし、寺を燒いたり、佛像を難波の堀江に投げ込んだりして、ひどく迫害を加へました。しかしこの時は、ちょうど佛教が盛んになる、運に向いてをつたとでも申すのでありませうか、この後も度々百濟から佛像が傳はつて來る、稲目の子の馬子は、父についで熱心にこれを信仰する、信者もだん〳〵多くなる一方でした。そのうちに蘇我氏と物部氏との勢力爭ひが、ます〳〵烈しくなり、蘇我大臣馬子は、ことに佛教を御信仰の聖德太子と共に、佛法嫌ひの物部大連守屋を攻め滅

ぼしましたので、今や佛法は、誰憚らず信仰することが出來るようになりました。

この戰爭の時に、太子も、馬子も、もし戰爭に勝つことが出來ましたなら、寺や塔を建てませうと、佛にお祈りしてをられましたので、守屋が殺された後、太子は難波に、四天王寺をお建てになり、馬子も飛鳥に、法興寺を建てましたが、それから後、寺の數もだんだん增して來る、出家する人も殖えて來る、佛教が傳はつてから七十年ばかりの間に、寺が四十六、僧が八百十六人、尼が五百六十九人、合せて千三百八十五人の出家が出來たといふ程の、盛んな勢となりました。

## 二十五、聖德太子と文化の進展（上）

聖德太子は第三十一代用明天皇の皇子であらせられます。第三十二代崇峻天皇が、急にお崩れになりました時に、皇子はまだ御年が二十歲にも足らぬ御少年であらせられました



から、御叔母樣の推古天皇が、御婦人の御身を以て、第三十三代の御位に卽かれまして、政治はすべて、太子にお任せになるといふことになりました。

太子は御生れつき、至つて御聰明なお方で、一度に十人の申すことを、よくお聞き分けになつたと申された程でありました。それで佛教を、高麗の僧惠慈に、漢學を、博士の覺哿にお學びになり、兩方ともによく御上達なさいまして、いろ〳〵と政治上、社會上の、御改革を行はれました。殊に太子は熱心に佛教を御信仰になり、たくさんの寺を建て、佛像をお作りになつて、これを御奬勵になりましたので、これから佛教は大いに廣まり、建築、彫刻、繪畫など、美術工藝の道も、大そう進步して參りました。なほこのことは後に述べませう。

不幸にして太子は、まだ御位に卽かれませぬ前に薨去になりました。この時、上は諸王諸臣から、下は一般の百姓に至るまで、年取つたものは可愛いゝ子供に別れたように、年の若いものは、可愛がつてくれた父母に別れたように、天下の人、こと〴〵く泣き悲し

んだと申すのを見ましても、そのお徳のいかにお高かつたかゞわかりませう。

太子は初めて憲法十七箇條をお定めになりました。これはおもに官吏の心得をお述べになつたものでありますが、その中にも、あつく佛教を信仰すべきことをお述べになつてあります。太子は政治をなされるについても、佛教によつて、和ぎのある、暖味の多いものになされたいとの、お考へであつたと見えます。

太子は又、日本で初めて歴史を御編纂になりました。日本にはもと文字がなく、古いことはたゞ親から子に、老人から若い者にと、口から耳へ語り傳へるだけでありましたが、支那から文字が傳はつて來てからは、それを書きとめたものも、だん〳〵出來ましたけれども、それはめい〳〵まち〳〵であつて、まだ日本の歴史といふ纏つたものはなかつたのです。太子御編纂の日本歴史は、惜しいことには、後に蘇我氏の滅んだ時に、大部分燒けてなくなりましたが、しかし日本歴史の大もとは、これできまりまして、後に古事記や、日本書紀のような、いろ〳〵のものが出來るようになりました。

聖徳太子

太子は又、支那へ使ひをおつかはしになりました。その目的は、これまでのように、あちらの進歩した技術者を招いたり、品物を輸入したりするといふばかりではなく、支那の進んだ政治の様子を御調査になる、佛教のお經をお求めになる、更に八人からの學生や僧侶を留學させて、數年がかりで、直接よい師について、お學ばせになるといふように、餘程御念の入つたなされ方でありました。殊にこのたびの使者をおつかはしになるについても、私共の最も敬服いたしますことは、太子がどこまでも對等の禮儀を取つて、日本の名譽を、外國にお輝かしになつたことでした。

## 二十六、聖德太子と文化の進展（下）

支那はやくから進歩した大國であります。その近所には、これと肩を並べることの出來るような、開けた、強い國は、一つもありませんでした。そこで支那人は昔から、「天



に二日なく、地に二王なし」といふ考へで、世界に於いて天子といふのは、支那の天子ばかり、外の國々は、皆支那に屬すべきものだといふ風に、大そう高ぶつてをりました。今日に於いてこそ、我が日本は世界の强國として、我々國民は、その名譽ある國家の民であることを、喜んでゐるのでありますが、この頃はまだ、日本には人口も少く、土地は、もちろん、支那と比べものにならぬ程に狹く、殊に文化の點に於いては、屬國たる朝鮮の諸國にも、及ばぬ程でありましたから、とても支那とは比べものになりません。支那から見れば、丸で小さい子供のようなものでありました。それで、昔九州地方の有力者が、支那では漢とか、魏とかいふ時代に、交通しました時には、支那の天子から、それ〴〵その地方の王の位を授けて貰つた程で、かれ等は自分で、支那の屬國たることを認めてゐた形でした。

もちろん、これは九州地方の有力者が、勝手にしたことでありまして、我が朝廷には、一向御關係のないことであります。我が朝廷から、直接支那へ使ひをおつかはしになつたの

は、應神天皇の御代が始めで、その後雄略天皇の御代にも、かさねて使ひをおつかはしになりましたが、これ等の時も、たゞあちらの進歩した技術を、お求めになるといふのが御目的で、國と國との御交際といふほどのことではなかつたのであります。隨つてその使者になつた漢人等が、途中で都合のよいはからひをしまして、技術家を連れて來たといふに過ぎませんでした。殊にその頃は、支那は南と北とに分れて爭つてゐる時代でありまして、我が國は、その南朝卽、吳の方へ使ひをおつかはしになつたのでしたから、支那一統の國と、御交際をお開きになつたといふ程ではありません。しかるにその後、支那には隋といふ强い國が出來まして、南北の兩朝を一つにし、非常にいばつてをりましたが、太子はこの隋に對して、對等の禮儀をもつて、國と國との御交際をお始めになつたのでした。

太子のお書きになつた國書には、立派に、「日出處の天子、書を日沒處の天子に致す」とお述べになつたのです。これには隋の天子もひどく怒りました。小さい國の癖に、生意氣だといふのです。しかしそこは使者に立つた小野妹子が、上手に扱ひましたと見えて、隋

小野妹子隋の天子に會ふ

の天子の機嫌もなほり、隋からはその返禮の使者が來る。太子は再び妹子をおつかはしになりました。このたびは、「東の天皇敬んで西の皇帝に白す」とお書きになりました。『東』といひ、『西』といふも、『日出處』といひ、『日沒處』といふも、皆同じことで、日本は東にある日の本の國、支那は西にある日の沒る國、卽、いくれ(暮)の國であることを、文字にさうお書きになつたのです。小さくても開けなくても、日本は立派な獨立國です。支那では、「天に二日なく地に二王なし」などと勝手なことをいひますが、太子の憲法には、「國に二君なし」とあつて、「地に二君なし」などとは仰せられません。大化の新政の時にも、中大兄皇子は、「天に二日なく、國に二王なし」と仰せられましたが、「地に二王なし」とはありません。小さくとも、開けなくとも、日本は立派な獨立國です。支那の皇帝が天子であれば、日本の天皇も天子であらせられます。太子がこのことをよくおわきまへになつて、隋からいろ〳〵のことをお學びになるにつけても、獨立國の體面を重んぜられて、大國の威に恐れず、どこまでも對等の禮儀を失はず、しかも圓滿に御交際をなされ、その文化輸



入の目的を達せられましたことは、まことに敬服し奉るべき次第であります。

太子は不幸にして、御位にお卽きにならぬ前に薨去になりましたが、この時におつかはしになつた留學生等は、十分學問をして歸つて參りまして、それ〴〵その學んだところをもつて、國のためにつくしました。後に行はれた大化の新政のごときも、これ等の留學生の學んで來たところが本になつたもので、太子ははやくおかくれになりましても、そのお植ゑつけになつた苗は、後にだん〳〵成長して、我が國の文化は大いに進歩し、大化の新政ともなれば、國家の隆盛ともなりまして、日本は大いに面目を改めて參りました。

## 二十七、大化の新政（上）

聖德太子はかく我が國の爲に、いろ〳〵結構なことをお殘しになりましたが、惜しいことには、大臣蘇我馬子のわがまゝだけは、これをどうすることもお出來にならないうちに、

おかくれになりました。しかしその蘇我氏のわがまゝの大木も、太子のお植ゑつけになつた苗木が成長して、たちまちこれを枯らしてしまひ、日本の政治は根本から立て直しになりました。これ卽、大化の新政であります。

大昔に神武天皇が、大和平野を御平定になり、そこで、天皇の御位に卽かれましてから後、國も次第に大きくなり、人口も次第に殖え、世の中も大いに開けて參りましたが、何分長い年月の間には、いろ〳〵の弊害もまた起つて參ります。

もと〳〵我が國では、中央には臣とか連とかいふような貴族があつて、代々その下についてゐる人民を率ゐて、天皇にお仕へ申し、また地方には國造とか、縣主とかいふものがあつて、これも代々土地人民を領して、天皇にお仕へ申す仕組みでありました。もちろん、その間には、天皇や、皇族方の御領地もありましたけれども、大體からいへば、「君の下に君があり、臣の下に臣がある」といふ工合で、國は廣くなり、人口は多くなりましても、天皇が直接御支配になるものは、さう多くはありませんでした。されば日本の多數の



民衆は、天皇から御覽になれば、陪臣と申して、御家來の又その家來といふわけであつたのです。そこで中に立つた貴族等の中には、ずいぶん部下の人民に對して、わがまゝなことをしたのも多かつたらしく、また朝廷からは、國司といふ官吏を地方につかはされて、地方の政治を御監督になりましたけれども、それもうまくは行かなかつたらしく、聖德太子の憲法には、しきりにこれを戒めてをられます。しかしもと〳〵君の下に君があつては、「天に二日なく、國に二王なし」といふ道理にもかなひません。いつかは一大改革が、行はれなければならぬわけのものでありました。

また貴族の中にも、大連とか大臣とかいはれる程のものは、多くの部下をもつて、その勢力が強く、だん〳〵と他の領分を併合します。ことに大伴氏が衰へて、物部氏と蘇我氏とばかりが、並び立つた頃になりましては、天下はほとんど、この兩氏の勢力に屬するといふ程のあり樣でありました。

しかるに、その物部氏が滅び、蘇我氏ばかりの時代となつたのですからたまりません。

蘇我大臣の勢は、殆ど皇室以上といふ程になりまして、すき勝手なわがまゝを致します。

蘇我馬子の妻は、物部守屋の妹でありましたから、守屋滅んで後の物部氏の財産は、自然妹の手に入つて、つひには蘇我氏のものになり、蘇我氏の財産は大變なものとなつたのです。

その頃皇室の方では、萬事が御儉約でありまして、推古天皇は、一天萬乘の尊い御身であらせられながら、お崩れの後には、わざ〳〵御陵をお作りにならず、前からあつた竹田皇子の御墓の中に、合せ葬り奉りますようにと、御遺言遊ばされました程でした。また聖德太子のお崩れの時も、御母君たる用明天皇の皇后の御陵の中に、お妃と一しよにお葬り申した程でした。しかるに蘇我馬子の妹で、欽明天皇の妃であらせられた堅鹽媛の御葬式の時には、その御陵も大陵といはれる程の大きなものであつたばかりでなく、その中に埋めた衣類その他の品物の數が、一萬五千もあつたといふ程の大したものでありました。また馬子自身の死にました時にも、一族相集つて非常に大きな墓を造りました。その墓は今



も大和の高市郡の、島庄の石舞臺といつて、もと馬子の家のあつた近所に遺つてをりますが、その墓の中の石室のごときは、その時代の天皇や、皇族方の御陵墓よりも遙かに大きく、ほとんど外に比べものが少いといふ程のすばらしいものであります。たゞこれだけのことによつても、蘇我氏がいかに富み、いかにわがまゝであつたかゞ知られませう。

## 二十八、大化の新政（中）

馬子の子蝦夷は、父につぎ、推古天皇の御代の末から、第三十四代欽明天皇、第三十五代皇極天皇の御代にかけて、大臣となりましたが、そのわがまゝは、父馬子よりも一層ひどいものでした。皇極天皇は女帝であらせられましたから、かれはことに心のまゝにふるまひまして、生きてゐるうちに自分と、入鹿と、父子の墓を造りますにも、勝手に天下の人民を使ひまして、はては聖德太子のお家の民をまでも狩り出して、少しも御遠慮致しません

でした。そしてその出來上つた墓は、恐れ多くも自分のを大陵、入鹿のを小陵といつて、天皇の御陵になぞらへました。この二つの墓は、今も大和の葛城郡に遺つてをります。その大きさは馬子のには及びませんが、石室の奥行きだけでも五六間もあるといふ、この頃のものにしては、すこぶる大規模なものです。

蝦夷はまた自分が病氣になつたといふので、天皇の御許しもなく、大臣の被る紫の冠を、勝手に子の入鹿に與へて、大臣の代りをつとめさせるといふような、ふらちなことをやつてはゞかりませんでした。

その子入鹿に至つては、わがまゝが父の蝦夷よりも更に一層ひどく、自分に縁のあるお方を御位に卽け奉らんが爲に、聖德太子のお子の、山背大兄王の御評判のおよろしいのを嫌つて、ふいに攻めて御一族二十餘人と共に、悉くこれを殺してしまふといふ程の、大逆をも平氣で行ひました。また父蝦夷が自分等の墓を陵といつたと同じように、蝦夷の爲に家を建てゝは、これを宮門といひ、自分の爲に家を建てゝは、これを谷宮門といひ、また自分



の子を王子と呼ばせるなど、すべて自分等が、天子であるかのように、かさねゞ〳〵不敬極まることをも行ひました。恐れ多くも天皇は、あれどもなきがごとしといふ御あり樣です。

そんなにわがまゝを行ひますから、入鹿はかねて反對者に憎まれ、恨まれることを覺悟して、これに對する用意を怠りませんでした。かれはその家を、城のように嚴重に構へて、飛鳥に勢力のあつた漢人等を身方につけ、常に大勢の兵士をして、これを守らしてをりました。また外出する時にも、いつも五十人の護衞兵を從へて、十分の用意をしてをりました。ですから、世間にそのわがまゝのひどいのを憤慨するものがありましても、これをどうすることも出來ませんでした。

しかし、かうなると申すのも、實は「君の下に君があり、臣の下に臣がある」といふ、世の中の仕組みの弊害がひどくなつた爲でありますから、いつかは世の中の作り直しが、起らねばならない場合となつて來たのでありました。

かく蘇我氏のわがまゝな行ひの、重なるにつきまして、最もこれを憤慨し、これを心配

したのは、大昔から神を祭る家筋の、中臣鎌足でした。蘇我氏父子の不敬の罪は、到底これを許すことは出來ぬ、もしこのまゝに打っちやつて置いたならば、おしまひには皇室に對し奉つて、どんなことをするかも知れぬ、國民はどんなに苦しめられるかも知れぬ、これはぜひかれ等を殺してしまはねばならぬと、堅い〳〵決心を致しました。しかし入鹿は、前申す通り、家にゐても、外出の時でも、いつも嚴重に護衛がついてゐるものですから、鎌足がいかに憤慨しても、自分だけの力では、これをどうすることも出來ません。そこで鎌足は、皇族の御方々の中で、しかるべきお方に本心をお打ちあけ申して、とも〳〵にこの大目的を達したいと考へました。この頃皇族の中では、舒明天皇と皇極天皇との御間にお生れになりました中大兄皇子が、一番しっかりしてをられますし、また蘇我氏のわがままをひどくお憎みになつてをられましたから、鎌足は、この皇子にお近付きになり、御相談を申し上げたいと思ひましたが、なか〳〵その機會がありません。

たま〳〵法興寺の庭で、皇子が蹴鞠のお遊びをしてをられました時に、鎌足も、その仲

間に加はつてをりましたが、どうかした拍子に、皇子のお靴が脱げて飛んだのを、鎌足は拾つて、うや〳〵しくさし上げましたのが本となつて、これからだん〳〵皇子とお親しくなりました。しかし何分にも入鹿の警戒が嚴重で、反對者に對して注意を怠りませんから、人目を避けて御相談申すことは容易でありません。そこで鎌足は、皇子と共に、さきに聖德太子のおさしずで隋に留學してゐた、南淵請安といふ學者のところへ、漢學を學びに參るといふことにしまして、その往復の途中で、いろ〳〵とお打ち合せをして、入鹿の警戒のない折りを見定めて、ふいにこれを殺さうといふことになりました。

そのうちに三韓から、貢ぎ物をさし上げるといふ日が參りました。天皇は大極殿にお出ましになり、入鹿は大臣の代理として、その御前におひかへ申し、そこで献上物を御披露申し上げるのですから、この時ばかりはさすがの入鹿も、護衞兵を連れてはをりません。この時こそと、かねて手筈をきめまして、皇子御自身、ふいに入鹿をお斬りになりました。天皇の玉座の御前に於いて、時の大臣を斬り、大極殿の上を、血で穢すといふことは、い



かに皇子と申しても、不敬の甚だしい次第ではありますが、實際この外に、入鹿を殺すことは出來なかつたのです。そこで皇子は、謹んで入鹿の惡逆無道の次第を申し上げ、天皇のお許しを願ひました。

この時入鹿の父蝦夷は家にをり、飛鳥の漢人等が武裝してこれを護つて、皇子の兵隊の攻めて來るのを待ち受けてをりました。しかし皇子が人をおつかはしになつて、我が國では大昔から、君と臣との別がはっきりとしてゐること、蘇我氏の大逆無道のことなどを、お聞かせになりましたから、漢人等もこれを聞いて退散し、蝦夷はつひに殺されました。この時聖德太子御編纂の歴史は、蝦夷がおあづかりしてゐたので、蝦夷が殺される時に、それを燒いてしまつたのは、惜しいことでした。

## 二十九、大化の新政（下）

多年わがまゝを極めた蘇我入鹿と、その父蝦夷とが殺されましたので、それを機會に皇極天皇は、第三十代敏達天皇の皇子で、天皇には御弟に當らせられる輕皇子に、御位をおゆづりになりました。これを第三十六代孝德天皇と申し上げます。中大兄皇子は皇太子となり、天皇を輔け奉つて、大いに世の中の立て直しを行はれました。この時始めて大化といふ年號をお定めになりましたので、これを『大化の新政』と申します。

これまでは久しい間、都は大抵大和にありまして、ことに推古天皇の御代以來は、漢人の根據地の、飛鳥の地にきまつてしまひ、蘇我の大臣はその漢人等を後援として、わがまの限りを極めたのでした。そこで蘇我氏の滅んだについて、皇太子は、飛鳥から遠く離れた難波に都をおうつしになり、邪魔になるもののをらぬところで、御心のまゝのあたらしい政治をなさることになりました。難波は今の大阪のことです。

大化の新政は、大體に於いて、聖德太子の隋におつかはしになつた留學生等が、あちらで學んで來たところを參考としたものでした。その中でも最も大切なことは、これまでは君



の下に君があり、臣の下に臣があるといふ工合で、天皇と一般民衆との間に、臣とか、連とか、國造とか、縣主とかいふものがはさまり、また土地も、これ等の貴族等が自分のものとして、勝手に支配してをつたのを、この時こと〴〵く御廢止になつたことです。

中大兄皇太子は、「天に二つの日なく、國に二つの君なし、天下を兼ね併せて、萬民を使ふべきものは、たゞ天皇ましますのみ」と仰せられまして、御自身の土地人民を、皆天皇にお返しになりました。もつともこの時までは、蘇我の大臣が一番勢力がありまして、天下の土地人民は、大かたその下についてゐたのでありますから、その蘇我氏といふ大きな頭がなくなりますと、その下についてゐたものは、皆天皇の土地、天皇の人民といふことになりましたので、その外の小さいものは、容易に朝廷にお收めになることが出來たのでありました。しかしそれも、たゞお取り上げになつたのではなく、國造、縣主等は、大抵郡司となつて、もとの土地人民を治める、その外のものも、それ〴〵身分に應じて、相當のお手當がありましたので、誰もさう不平を申すものがなかつたのであります。

かくて天下の土地はことゞく公の土地となり、天下の人民はことゞく公の人民となりましたから、その土地を、男には二反づゝ、女には一反百二十歩づゝ、みんな同じように、すべての人民に、お分け與へになるといふことになりました。これを『口分田』と申します。

口分田は、人が死ねばこれを公に收め、人が生れゝば與へるといふのでありますから、どの家にも、家族の數に應じて、同じ割りあひの田地があり、それを耕作して、その一部分を租稅に納めれば、その殘りで、日本國中のすべての人が、安全に生きて行くことが出來るわけで、食ふに困るといふような貧乏人は、一人もない筈だといふ、まことに結構な仕組みであります。しかし人間には、勤勉なものもあれば、怠けものもある、强いものもあれば、弱いものもある。達者なものもあれば、病身なものもある、人の分までも取らうといふ、横着者もあれば、自分のものをも持ちかねるといふ、意氣地なしもあるのでありますから、この結構な仕組みも、いつまでも規則通りには行はれず、いつの間にか崩れて



しまつたのは、まことに止むを得ない次第でした。

地方では、國造、縣主等が、自分で自分の土地人民を領することがなくなりましたから、これを國に分け、國を更に郡に分けて、國には國司、郡には郡司を置いて、これを治めしめることになりました。國司は今の府や縣の知事や、部長、事務官のように、中央政府から任命せられ、年限を定めて地方へ出かけたものです。その一番上に立つのが守、その次ぎのを介といひます。よく武藏守だとか、上野介だとかいふのはこれです。郡司は前に申した通り、その地方の有力者を任命したもので、まづもつてもとの國造等の一族を取り、代々その職をつがしめたのでありますから、これは大體、昔のまゝの引きつゞきといつてよいのでした。しかし前の國造の時には、めい〳〵自分の土地人民を、自分の勝手に治めてゐたのでありましたが、今度は國家の官吏として、國家の規則によつて、國家の土地人民を支配することになつたので、大分性質は違ひます。

この規則も、口分田が崩れたと同じように、後には、やはりだん〳〵崩れて參りました。

後の世に高武藏守とか、吉良上野介とかいひましても、それはたゞ名前ばかりで、實際にかれ等は、武藏や上野へ行つて、これを治めるのではなくなつてしまつたのです。

## 三十、朝鮮半島諸國の離反

孝德天皇が都を難波におうつしになり、こゝで大化の新政は行はれましたが、もとの都の飛鳥には、有力な大寺も多く、また昔ながらの漢人等の勢力も、やはり大そう強かつたものと見えまして、せっかく出來上つたこの難波の新都も、ながくは續かず、都は再びもとの飛鳥へ戻ることとなりました。たま〳〵孝德天皇がお崩れになりまして、前の皇極天皇が、再び御位にお卽きになりました。これを第三十七代齊明天皇と申し上げます。中大兄皇子は、引き續き皇太子のまゝで、政治をお輔けになります。何分にも世の中の立て直しといふ、大きな爲事がありますので、この方が、御都合がおよろしかつたのでありませう。

この際、朝鮮のことについて、面倒な問題が起つて參りました。

これより先朝鮮では、新羅がだん〳〵強くなつて、任那や百濟の方へせまつて參ります。すでに欽明天皇の御代には、百濟の聖明王も殺されますし、任那の諸國は、皆新羅の爲に併合せられて、任那の日本府も引きあげなければならぬようになつてをつたのです。そこで我が國からは、たび〳〵兵隊をさし向けて、百濟を助け、任那を再興しようとなされましたけれども、何分遠方のことではあり、新羅の勢は強くて、なか〳〵思ふようにはなりませず、朝鮮は日本に取つて、かなり厄介ものとなつて參りました。

この時新羅の爲に捕虜になつた兵士のうちに、調伊企儺といふ人がありました。なかなか元氣の盛んな人で、いくら責められても、降參致しません。新羅の將は、いかにもして伊企儺を恐れ入らさうとして、刀を拔いてこれをおびやかし、日本の方へ尻をむけさせて、「日本の將我が尻を食へ」といへとせまりましたところが、伊企儺はさっそく反對の方へ尻を向けて、「新羅王我が尻を食へ」と罵りました。何度責められても、同じことを繰り返



すので、とう〳〵殺されたといふ、勇しい美談も殘つてをります。

齊明天皇の御代の頃になりましては、新羅の勢ます〳〵強くなりましたが、この頃支那は、隋が亡んで、唐の代となり、國の勢が大そう盛んでありましたので、新羅はその助けを借りて、ます〳〵百濟へ逼つて參ります。そこで皇太子は、百濟をお助けになる爲に、齊明天皇のお供をして、九州までお出ましになりました。天皇が御婦人の御身をもつて、殊に御年六十八と申すような、御高齢の御身を以て、はる〳〵百濟をお救ひにと、九州までお出ましになりましたことは、昔神功皇后が、御婦人の御身で、新羅をお從へになりました以上の御盛んなことで、天皇の御決心の程、まことに恐れ多い次第でありましたが、不幸にして天皇は、御病氣のために、九州でお崩れになりました。これが爲に天皇は、昔の神功皇后のような、花々しい御成功をお收めになることが出來ませんでしたのは、かへす〳〵もお痛はしく、また殘念な次第であります。

天皇崩御の後、皇太子は兵隊をおつかはしになつて、百濟を助け、唐の兵と度々戰爭が

ありましたが、何分にも、相手は唐といふ大國であり、それに新羅も侮り難い勢を持つてをります上に、この頃日本では、大化の新政の跡始末もしなければならず、また東北の蝦夷の方にも、いろ〳〵事件が起つてをりまして、力を朝鮮の方にのみ、用ひることが出來ません。我が軍つひに利を失つて、百濟はとう〳〵滅びてしまひました。皇太子は時の勢をお察しになつて、我が軍を長く朝鮮の方にのみ勞れしめるよりも、むしろこの多年の厄介ものをお見捨てになつた方が、國の爲に利益であると思し召され、つひにこれを引きあげになりました。

その後高麗も、また唐の爲に滅ぼされて、新羅ばかりが殘り、かくて久しく我が屬國となつてをつた朝鮮半島も、これから全く離れてしまひました。そこで百濟の王族や、臣民等が、大勢我が國に移住して參りましたが、その中には、學者を始めとして、いろ〳〵の道に長じた人々が多く、かへつて日本の爲になつたことが、少くありませんでした。殊にその百濟王族の家からは、後に第五十代桓武天皇の、御母君のようなお方も御出ましにな



りました。

その後明治四十三年に至り、韓國の併合があり、朝鮮は日本と一つになつてしまひました。これは千二百五十年ばかり前に、一旦離れたこの朝鮮が、本通りになつたものでありまして、神功皇后の古に返つたと、申してよろしいのであります。

しかし、何しろ約千二百五十年といふ、長い年月の間、別の國になつてをつたものですから、朝鮮人といへば、なんだか內地人とは、違つた民族のように考へるものもありませう。が、前に繰り返し述べましたように、朝鮮人といつたとて、人種の上で、日本民族とさう區別があるものでなく、現に神功皇后の御母君は、新羅の王子だといはれた天日槍の御子孫であり、桓武天皇の御母君も、百濟王家のお方でおはしたと申す程で、恐れ多くも皇室の御血の中にまで、朝鮮人の血は流れてゐるのであります。その朝鮮が併合によつて、日本の一部となりましたのは、久しく家出してゐた家族が、久し振りに、暖い家庭へ戻つて來たようなものであります。

# 三十一、奈良の都（上）

孝德天皇は難波の新都に於いて、大化の新政を行はせられましたが、やはり舊都の方の力が強く、まもなく都は飛鳥へ戻り、中大兄皇子が、齊明天皇を奉じて、こゝで政治をお執りになりましたことは、すでに述べましたが、齊明天皇が九州でお崩れになりました後も、皇太子はまだ御位には卽かれませず、六年間も皇太子のまゝで、この都にをられました。これにはよく〳〵深いわけのあつたことと察せられます。

この間にいよ〳〵百濟は滅び、太子は我が軍を朝鮮からお引きあげになりましたが、唐や新羅とは和睦が出來まして、これから後も引き續き、交通は絶えませんでした。しかし何分にも、これ等の強い國が西に控へてをりまして、いつどんな事件が起らぬともわかりませんので、所々の要害の地に、城を築き、それにおそなへになりました。かくて皇太子



は、齊明天皇お崩れの後六年目に、近江の大津宮にお遷りになりまして、翌年こゝで初めて天皇の御位にお卽きになりました。これを第三十八代天智天皇と申し上げます。大津宮は今の大津市よりは北の方にありました。

天皇が飛鳥から近江にお遷りになりましたのは、大化に難波へお遷りになりましたのと同じ意味で、飛鳥では、やはり昔からのいろ〳〵の關係があつて、御理想通りの新しい政治をなさるには、邪魔が多かつた爲でありませう。こゝで天皇は、いろ〳〵新しい法令をお定めになりました。この法令は、後に第四十二代文武天皇の、大寶元年に至つて修正されました。世にこれを『大寶律令』と申し、これから後、ながく日本の政治のもととなりました。大化の新政は、こゝに至つて、いよ〳〵出來上つたと申してよいのであります。

しかし、この大津の都は、都遷しの時から、あまり評判がおよろしくなく、やはり飛鳥の舊都を望むものの方が、勢力が多かつたと見えまして、天智天皇のお崩れになりました後、まもなく都は、三たび飛鳥へ戻りました。そして天皇の御弟大海人皇子が、そこで

御位に即かれました。これを第四十代天武天皇と申し上げます。

天武天皇の御即位につきましては、飛鳥の漢人等が、大そう御盡力申したのでありました。それでその地がまた都となりましたのは、當然のことであります。しかし天皇も、いよいよ飛鳥へお落ちつきになつて見れば、やはりいろ〳〵の邪魔があつて、御心のまゝの御政治をなさることが、お出來にならなかつたと見えまして、御一代の間、たび〳〵方々へ都遷しの御計畫をなさいました。その御計畫が、いつも〳〵御中止になり、御實行が出來なかつたのは、やはり飛鳥の勢力が、相變らず強かつた爲でありませう。最後には飛鳥の近所で、新しい宮をお造りにならうとなさいましたが、それも御實行にならぬうちに、天皇はお崩れになりました。實際飛鳥の漢人等は、日本文化の上には大そう功が多かつたのではありますが、あまり勢力が盛んになりましたので、ずいぶん惡いことをも遠慮なくするようになりまして、あの蘇我氏のわがまゝを助けたごときも、やはりその一つでありますが、皇室におかせられても、實際この漢人の勢力には、かなりお困りになつたのでした。



天武天皇お崩れになつて、皇后が御位に即かれました。第四十一代持統天皇であらせられます。先帝の御志をついで、飛鳥の近所の藤原宮にお遷りになりました。大化の難波の都は、支那の唐の都の長安の造り方にならつて、東西と、南北と、縱横十文字に、道が通つて、碁盤目のようになつて、立派な都市計畫によつて出來たのでした。しかしそれはまもなくやめになり、もとの飛鳥が再び都となつたのでありましたが、このたびの藤原の都は、同じ飛鳥の近所とは申せ、町割りなどまで支那の都の風に、立派に出來上つたのです。そして次ぎの文武天皇も、またこの宮においでになりまして、あの大寶律令は、こゝで出來たのでありました。それで都の樣子も、その大寶令の中に書いてありますが、それによると、大體次ぎに述べる奈良の都のようなものでした。

かく藤原宮は、一旦立派に出來上りましたけれども、飛鳥の近所では、やはり都合がお惡かつたと見えまして、御遷都以來二十年ばかりで、文武天皇は、又都遷しの御計畫をなさいました。そのうちに天皇はお崩れになり、次ぎの第四十三代元明天皇の御代の初めに、

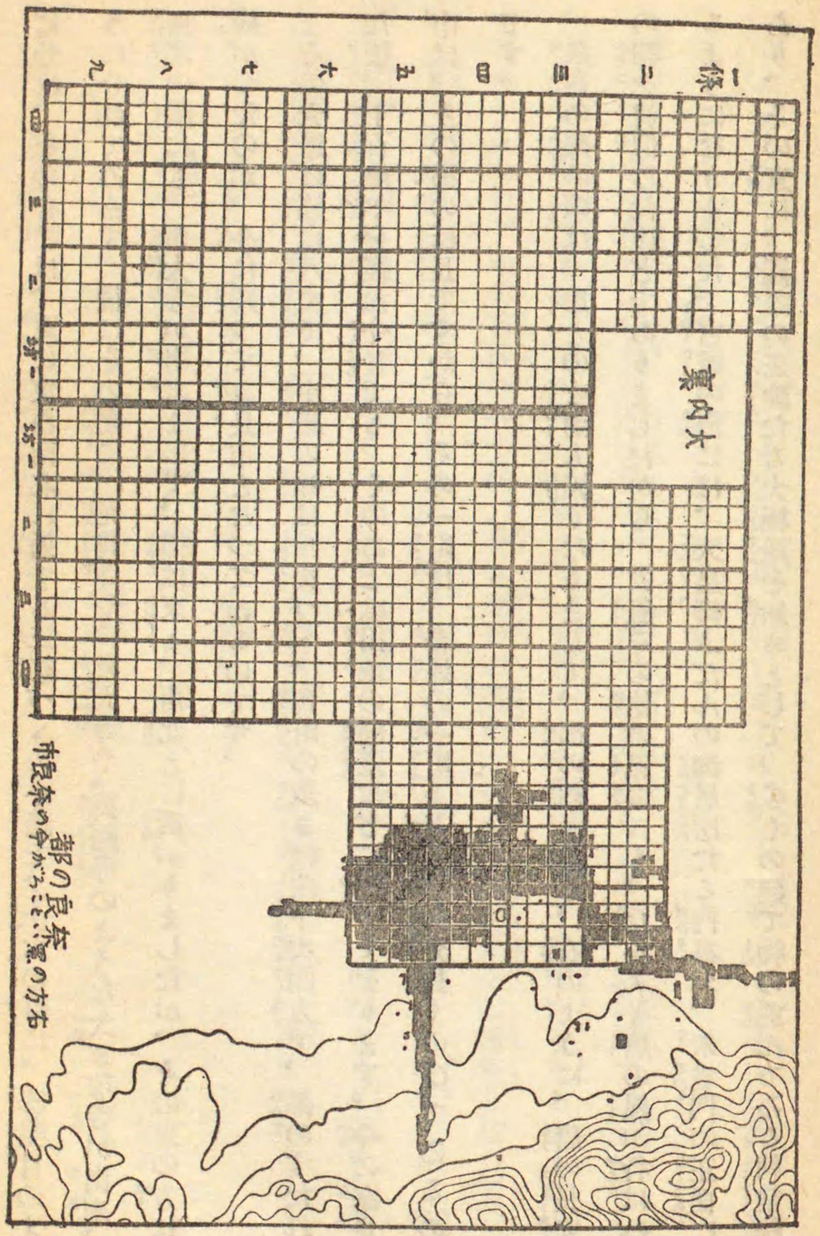
いよ〳〵御實行になりました。これが有名な奈良の都です。

# 三十二、奈良の都（下）

奈良の都は今の奈良市の西にありました。今の奈良市は、都の東にいくつもの大きな寺が出來て、町が自然その方へ廣がり、後に都がやめになつても、その寺の勢力が盛んであつた爲に、こゝばかりは衰へずに遺つたものなのです。

奈良の都は、大體藤原の都の作り方によつて、更にそれを大きくしたものでした。もとは東西約四十町、南北約四十五町の長方形のもので、その北の端の中央に、約十町四方の宮城、卽、大内裏があり、宮城の南大門が、朱雀門で、その門からまつすぐに、南に通ずる朱雀大路によつて、都は左京と右京とに分れ、その左右兩京ともに、おの〳〵東西に通ずる八筋の大路で、九條に分れ、その各條は、南北に通ずる三筋の大路で、四坊づゝ






都の奈良
市奈良の今がつこゝ黒の方右

に分れ、その各坊は、更に東西南北に通ずる三筋づゝの小路で、十六の町に、碁盤目のように分れてゐます。後にその東に、元興寺や、東大寺や、興福寺のような大きな寺が出來、西北の隅にも、西大寺が出來まして、都は東と、西北とに廣がりましたが、その東の方に廣がつたのが、今に殘つて奈良市となつてゐるのです。

その大路は幅は八丈で、小路の幅は四丈づゝ、各町の廣さは四十丈四方で、都のすたれた後、千百餘年を經た今日でも、そのあとは田地の畦道などに殘つてをります。今の奈良市は、その都の延長ですから、その一町は、普通の一町よりも、大分長くのびてゐるのです。

奈良の都の頃は、唐との交通も繁くなりまして、都の割り方も、右のように、唐の長安の都を眞似したほどでありましたから、衣服その他の風俗にも、だん〳〵唐の風が行はれるようになりました。宮城の内には、天皇御ふだんの御居所たる内裏が、朱雀門の正面にあり、その東に、國家の正廳たる大極殿を始めとして、多くの建て物の並んでゐる朝堂院



がありました。その朝堂院のいろ〳〵の建て物のあとは、今も大體もとのまゝに殘つてをつて、近ごろ史蹟として、保存されてをります。

昔の天皇の宮殿は、伊勢の皇太神宮や、出雲の大社で見るような、神社風の建築でしたが、奈良の都の宮殿は、唐の風の瓦葺きで、大體今の京都市の、平安神宮を見るようなものでありました。その宮殿の一つは、今も奈良の都あとにある唐招提寺の講堂となつて、ほゞ昔の形のまゝに、殘つてをります。都の内外には、立派な寺がたくさん出來ます。貴族や官吏の服裝なども、唐の風になります。市街にある住宅までも、だん〳〵瓦葺きになり、白壁を塗り、柱を赤く染めるようにと、御奬勵になつた程ですから、萬事がはな〳〵しく、はでやかになりました。その頃の人の歌に、

青丹よし、奈良の都は咲く花の
匂ふがごとく今盛りなり

と、ありますのは、そのはなやかな都のあり樣をうたつたのです。

# 三十三、奈良朝佛教の隆盛（上）

元明天皇が奈良に都をお遷しになりましてから、元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁の御六代を經て、第五十代の桓武天皇の御代の初めに、山城にお移りなさいますまで、七十六年の間に、一時外へお移りになつたこともありますけれども、まもなくもとへお戻りになり、こゝに特別のはなやかな時代が起りました。これを『奈良朝時代』と申します。

奈良朝時代の文化の遺物として、一番目立つて後の世に殘つてをりますのは、たくさんの名高い寺や、佛教に關係した美術品です。

佛教は、欽明天皇の御代に我が國に傳はりましてからこのかた、初めのうちは強い反對者もありましたけれども、物部氏が滅びてからは、もはや邪魔をするものもなく、だんだんと盛んになりまして、次ぎから次ぎへと廣まりました。



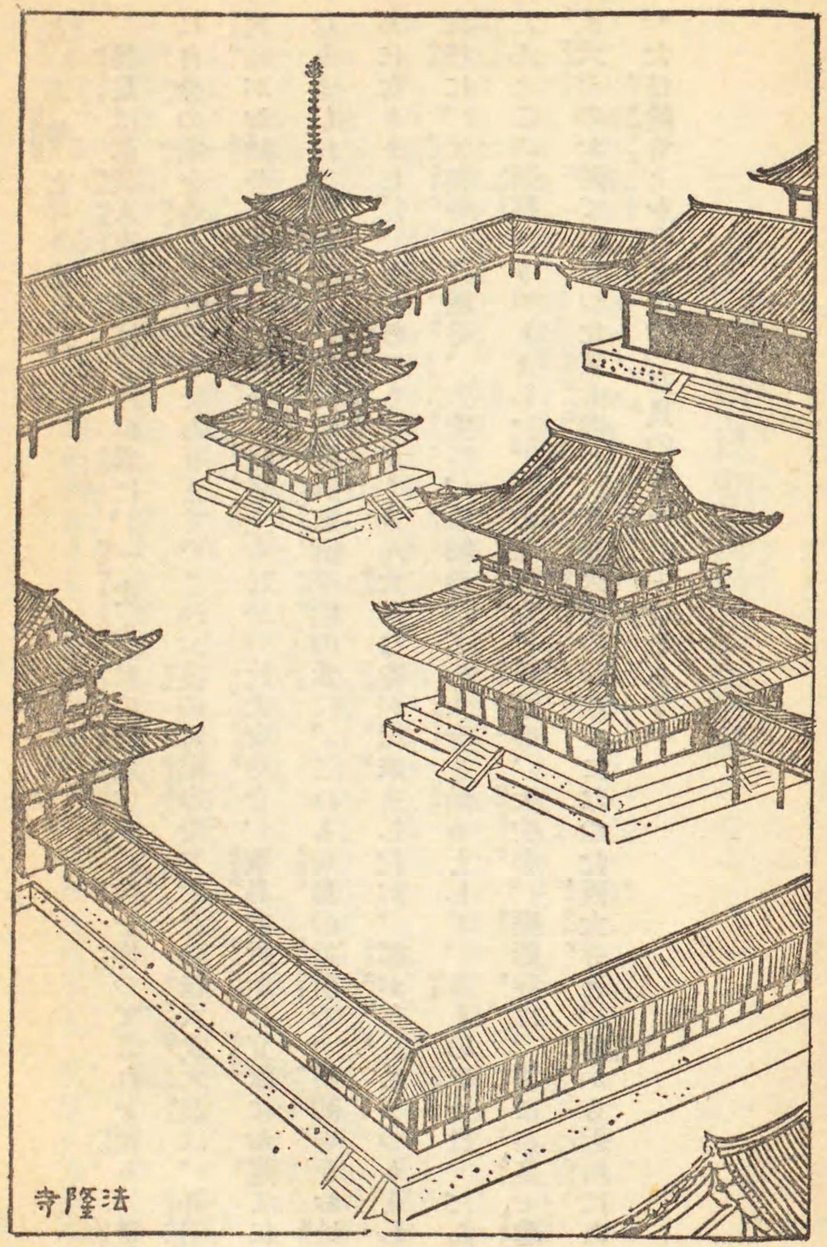
初めの頃はどうしても、都の土地であり、また漢人の根據地として、我が國文化の發源地であるところの、飛鳥地方が佛教の中心となり、法興寺、元興寺、橘寺などを始めとして、いくつもの大きな寺が出來ました。けれども、聖德太子はさすがにお考へが大きくいらつしやいまして、ひとりこの地方ばかりでなく、攝津の難波には四天王寺を、また同じ大和のうちでも、飛鳥とは遠く離れて、後の奈良の都に近い斑鳩といふところには、法隆寺を、それ〴〵お建てになりますし、また後に平安京となつた山城の北部には、その地方の大地主の秦川勝に命じて、廣隆寺をお建てになりました。後に孝德天皇は、四天王寺の近所に、難波の都をお造りになる、元明天皇の御代には、法隆寺の近所に奈良の都が出來る、桓武天皇は、廣隆寺のある所に、平安京をお造りになるといふ風に、それ〴〵その近所に都が出來たのは、偶然のこととは申しながら、太子が將來盛んになるべき土地を、お撰びになつたわけで、太子が御生れつき御聰明におはし、よく未來のことを知つてをられたと言はれてをりますのも、もつともだと申さねばなりません。遠く離れた信濃の善光寺の如

きも、やはり太子の頃に、難波から佛像を移して、こゝに出來た寺だといはれてをります。

中にも法隆寺は、もと太子のお宮のあつたところに出來た寺で、天智天皇の御代に一旦燒けましたけれども、まもなく再建せられますし、その近所には、太子のおかくれの後に、御遺族の方々がお建てになつた法起寺や、法輪寺がありまして、これらの寺々には、古い時代の建て物が、今に殘つてゐるのであります。これはひとり我が國での、一番古い建て物といふばかりではなく、世界中での、一番古い木造建築物として、誇るべきものであります。

太子がおかくれになりましても、太子のお植ゑつけになつた苗は、だん〳〵と成長して、佛教はます〳〵盛んになりました。初め佛教の傳はつて來た時に、最も熱心であつた蘇我氏の方からは、かへつて聖德太子の御遺族を、こと〴〵く滅ぼしてしまふといふ、入鹿のような者も出ましたが、その反對に、佛教排斥の祭神の家たる、中臣氏の方から出た鎌足までが、大いに佛教を信仰しまして、大化の新政には、大そうこれを御奬勵になる





といふ勢となりました。

鎌足は蘇我入鹿を滅ぼさんが爲に、一丈六尺の釋迦如來の像を作つてこれを祈り、後に自分の家を寺としたほどであります。これが後の興福寺です。その後天武天皇は、舒明天皇がお始めになつて、容易に出來上らなかつた大安寺を、飛鳥の近所に立派にお建てになりました。天皇は又、皇后の御病氣御平癒の爲に、これも飛鳥の近所で、藥師寺をお始めになりました。その外にも、たくさん大きな寺が出來ましたが、都が奈良にうつりました後に、元興寺、興福寺、大安寺、藥師寺などの大寺を始めとして、多くの寺々は、だんだんとこの新都にうつりました。この元興寺、興福寺、大安寺、藥師寺は、後に奈良で聖武天皇のお建てになつた東大寺と、孝謙天皇のお建てになつた西大寺と、前から近所にあつた法隆寺とを合せて、『奈良の七大寺』と申します。



# 三十四、奈良朝佛教の隆盛（下）

この頃の佛教の信仰は、おもに佛に祈つて、この世の幸福を求め、禍を避けたいといふことでありました。法隆寺の佛像の後に彫りつけてある願文を見ましても、聖德太子の御病氣がおなほりになつて、長生きをなさいますように、萬一それがかなひませぬなら、おかくれの後に、淨土にお生れ遊ばすようにと、祈つてあるのであります。御代々の天皇がこれを御信仰なさるにも、佛の功德によつて、天下は太平に、國家は安全に、人民は幸福にと、お祈りなさるのでありました。そこで天武天皇は、たゞに寺を建て、佛像を作るといふばかりでなく、國々に御命令なされて、今でいへば府廳、縣廳ともいふべき、その頃の國府で、國家を護る功德のある、經文を讀ましめられ、また家々に、佛を祭らしめられました。これで佛教は、我が國の國教ともいふべきものとなつたわけです。次ぎに持統天

皇は、蝦夷や隼人の國にまで、佛教をお廣めになりまして、前に推古天皇の御代には、わづかに四十六であつたお寺の數が、この御代には、五百四十五といふたくさんなものになりました。

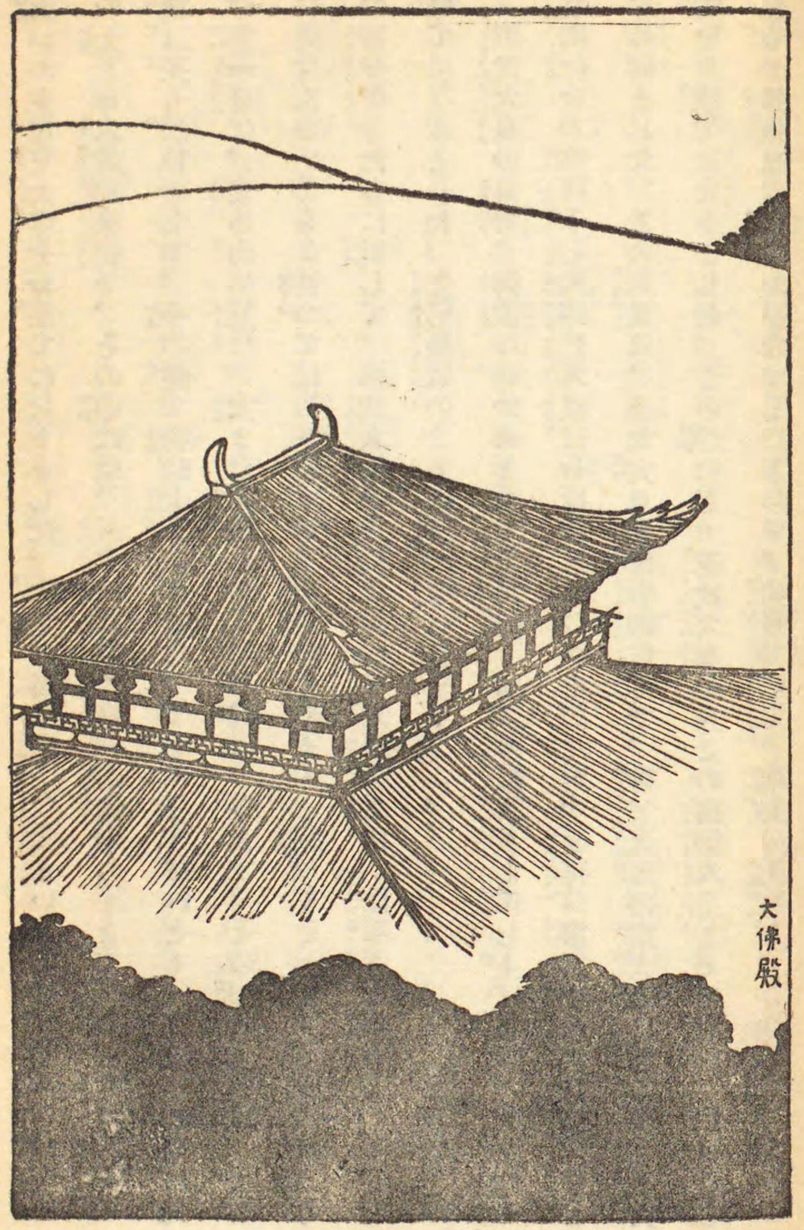
第四十五代聖武天皇は、ことに佛教御信仰でありまして、國府毎にお經を備へるばかりでなく、佛像を作り、塔を建てさせられました。

大昔には祭政一致と申して、神を祭ることと、政治卽、『まつりごと』とが、一つでありましたが、今は佛を祭ることが、國家の政治の一部となつたのです。

かくて天皇は、つひに國家の費用で、國毎に國分寺といふ二つの寺をお建てになりました。一つは僧寺で、常に二十人の僧がをり、一つは尼寺で常に十人の尼がをり、國家の安全、人民の幸福を祈つてをります。

今も國々に、よく國分寺といふ寺が殘つてをりますが、今は寺がなくても、國分などといふ地名のあるのは、もとこの寺のあつた所です。また特に大和の國分寺として、非常に





大佛殿

大がかりな東大寺をお建てになりました。本堂の高さ十六丈といふのですから、世界一の大きな木造建築物で、その中には、五丈三尺の大佛の銅像があります。この寺は、その後二度も燒けまして、今の建て物は大分小さくなつてをりますけれども、奈良へ行けば先づ第一番に、東の山の麓に、大きな屋根があるのが目につきます。その中の大佛は、火事にいたんでいくらか補つてはありますが、大體に昔のまゝで殘つてをります。この東大寺の國分僧寺たるに對して、聖武天皇の皇后におはす光明皇后は、法華寺を尼寺として、お建てになりました。光明皇后のことは後に申しませう。

聖武天皇の皇女、御位に卽かれまして、第四十六代孝謙天皇と申し上げます。天皇は一旦御位を、第四十七代淳仁天皇におゆづりになりましたが、後再び第四十八代稱德天皇となられました。この天皇は、また大そう佛敎御信仰で、御父天皇の東大寺に對して、西大寺をお建てになりました。この外にも、聖武天皇からこの稱德天皇までの間に、出來ました寺や佛像は、實におびたゞしいもので、建築、彫刻、繪畫の美術も、これが爲に大いに



進歩し、奈良の都のはなやかなのは、おもに佛敎のためであつたと申してよいくらゐでした。この頃東大寺の大佛に御寄附になりましたたくさんの品物は、今もそのまゝに、皇室の御物として、東大寺の正倉院といふお庫に殘つてをります。毎年御風通しの時には、しかるべき人たちに、拜觀をお差し許しになることとなつてをりますが、その御立派なことには、拜觀した誰もが驚かぬものはありません。こんなに古い、こんなに立派なものが、こんなにたくさんに、一所に、そのまゝ殘つてゐるといふことは、まったく世界中他に例のないところで、實に我が國の誇りとすべきものであります。

佛敎の盛んになると共に、立派な僧侶もたくさん出て參りました。中にも行基のごときは、最も名高いもので、その行くところ、多くの信者が、雲のように集るといふ程でありました。行基はそれらの信者を使つて、道を開き、橋をかけ、船つきの場所を定めたりして、交通の便利をはかり、また池を作つて耕作をすゝめるなど、多くの社會奉仕の事業を行ひました。また光明皇后は、病人に藥を與へる施藥院や、孤兒を世話する悲田院などを

お創めになりましたが、このように、多くの慈善事業も、佛敎の盛んになると共に、起つて參りました。

しかし僧侶の中には、道鏡のようなふらちなものも出て來れば、寄附を得んが爲に寺を造るといふような、横着なものも出て來ます。殊に東大寺を始めとして、多くの寺を建てたり、佛像を作つたり、その他佛事の爲に費した費用が甚だ多くかゝつたので、國はだんだん貧乏して參りましたのも、またやむを得ぬことでした。

## 三十五、奈良時代の行き詰り

稱德天皇は、かねて佛敎を御信仰のあまり、もと世間で評判のよかつた道鏡を、ひどく御信用になりました。この僧はもと、河内の弓削氏の人で、よく印度語が出來るといふ程の學者でもあり、殊に葛城山に籠つて、熱心に佛道を修行したといふ、評判の人でしたか



ら、佛敎に御熱心の天皇が、御信用なさつたに御無理もありません。ところで弓削氏は、物部守屋の後をうけた家でありますから、道鏡は僧侶の身でありながらも、どうかして先祖のような身分になりたいと、ひそかに大きな野心を抱いてゐたのです。そこで上手に天皇にお取り入り申し上げて、つひに目的通りの大臣の位にのぼり、おしまひには、法王の位をまで授けられて、天皇に准ずる程の御待遇を受ける程の身分になりました。これは實に非常なことでありますが、これも天皇が佛法御信仰のあまり、一時ついお目がくらまれたのでありました。かくて道鏡は、調子に乘つて頻りにわがまゝな政治を行ひます。奈良時代はだん〳〵行き詰つて參りました。しかしその勢が大そう強いものですから、誰もそれをどうすることも出來ませんでした。たま〳〵宇佐八幡大神のお告げだといふことで、「道鏡を天皇の位にお卽けになりますれば、天下は太平になりませう」と、申し上げたものがありました。それを聞いた道鏡は、ます〳〵調子づいて、とう〳〵自身天皇にならうといふ、とんでもない、大野心を起すようになりました。

いかに天皇の御信用が厚くとも、いかに神のお告げだといふものがあつたとも、臣下の身として天皇にならうなどといふ大野心を起すとは、我が萬世一系の國體の國に於いて、あるべからざることであります。いふまでもなくこれは和氣清麻呂等の精忠によつて、失敗に終りましたけれども、こんな問題が起つたと申すにも、やはり我が國體の上から、幾分のわけがないでもありません。

もと〳〵道鏡は、その身分を尋ねましたならば、天智天皇の御孫に當る人で、はやく弓削氏の家をついでゐたのでありました。さればもとは皇族に深い緣故があつた筈であります。しかし、かりにもと皇族であつたとしましても、すでに弓削氏の人となつてをれば、もちろん、臣下の身でありまして、天皇の御位に卽くなどといふ資格はありません。

それを望んだ道鏡が、ふらち千萬であることは申すまでもありませんが、しかしもと道鏡が皇族であつたといふが爲に、天皇も佛法御信仰のあまり、ついその御信用の厚いまゝに、法王といふ皇族類似の位をお授けになつたり、道鏡を天皇の御位に卽けたらばなどいひ出

すものも出て來たり、道鏡自身も大それた野心を起すようになつたのでありませう。

むかし平群眞鳥といふものが、天皇にならうといふ大野心を起したことがありました。また後には平將門が、東國によつて獨立をはかり、天子氣取りになつたこともありました。もちろん、いづれも目的を達する筈はなく、皆殺されてしまひましたが、しかし眞鳥は、孝元天皇の曾孫の、武内宿禰の孫であり、將門は桓武天皇の御孫、高見王の曾孫でありました。共に皇族出であるので、勢にまかせては、ついそんな不埒千萬な大野心をも、起して見たのでありました。道鏡もまたその通りで、もと皇族であつたといふことから、ついそんな間違つた考へをも、起して見ましたのです。我が萬世一系の大日本帝國に於いて、いかに勢がつよくとも、はじめから皇室に少しも因緣のないものが、天皇にならうなどといふことを、考へて見たものの嘗てないことは、實に我が國體の尊いところであります。

稱德天皇お崩れの後、第四十九代光仁天皇が御位をつがれました。天皇は天智天皇の御孫であらせられます。天皇の御即位と共に、道鏡は下野に逐ひやられて、まもなくそこで



死にました。この道鏡の排斥については、もちろん和氣清麻呂が、道鏡の勢に恐れず、一身のことをもかへり見ずして、正しい道理をおし通した爲でありますが、その蔭で藤原百川が、これを助けてをつたことを忘れてはなりません。百川は藤原鎌足の子の、不比等の孫で、宇合の子であります。藤原氏は中臣鎌足が始めた家です。

## 三十六、平安遷都

道鏡が排斥せられては、自然世の中の樣子が變つて來ねばなりません。この光仁天皇の御代の頃は、「咲く花の匂ふが如く」といはれた奈良の都の時代も、實はほとんど行き詰りのあり樣となつてをりました。萬事があまりにはなやかであつたのと、ことに佛法をあまりに御奬勵になつたのとの爲に、國の富はだん〳〵減つて來る。その上に道鏡のわがまゝの爲に、よほど政治もみだれて參りまして、いつかは大きな立て直しをせねばならぬよう

になつてゐたのであります。そこで光仁天皇の御一代は、專らその整理におつとめになりましたが、第五十代桓武天皇の御代の初め、延曆三年といふ年に、藤川百川の甥の種繼のおすすめによつて、急に山城の長岡へ、都をお遷しになることになりました。長岡は今の京都市の西南、向日町停車場のあるあたりです。

桓武天皇は光仁天皇の御子であらせられます。光仁天皇の御卽位についても、また桓武天皇の御卽位についても、百川が專ら御盡力申し上げたのでありましたから、天皇は大そう百川を重んじてをられましたが、百川は不幸にして早く死にまして、甥の種繼が代つて、大そう天皇の御信任を受けることになりました。この種繼の母は、當時の富豪秦朝元の娘であります。そんな關係で、種繼は秦氏の助けを得まして、この財政の行きつまりの際にも、急に遷都が出來たのです。種繼はこの新しい都で、大いに自分の腕を振はうとしたのでありませう。しかるにまもなく種繼は、反對者の爲に暗殺せられました。そこでせつかくお遷しになつたこの長岡の新都も、十年かゝつても、つひに出來上りにならぬうちに止



めになり、延曆十三年に、更に和氣清麻呂のおすゝめにより、急に今の京都市のところに、御遷都になりました。これを平安京と申します。こゝは聖德太子の御頃に、このあたりの大地主秦川勝が、廣隆寺を建てましたところで、その子孫が引き續き、この地方の大富豪でありました。その大富豪の秦島麻呂の娘が、藤原不比等の子房前の孫の、小黑麻呂の妻であつた關係から、和氣清麻呂は、長岡の都が十年たつても出來上らないので、この小黑麻呂を押し立てゝ、大富豪秦氏の助けによつて、更にこゝに、遷都の大事業をなすことが出來たものと見えます。

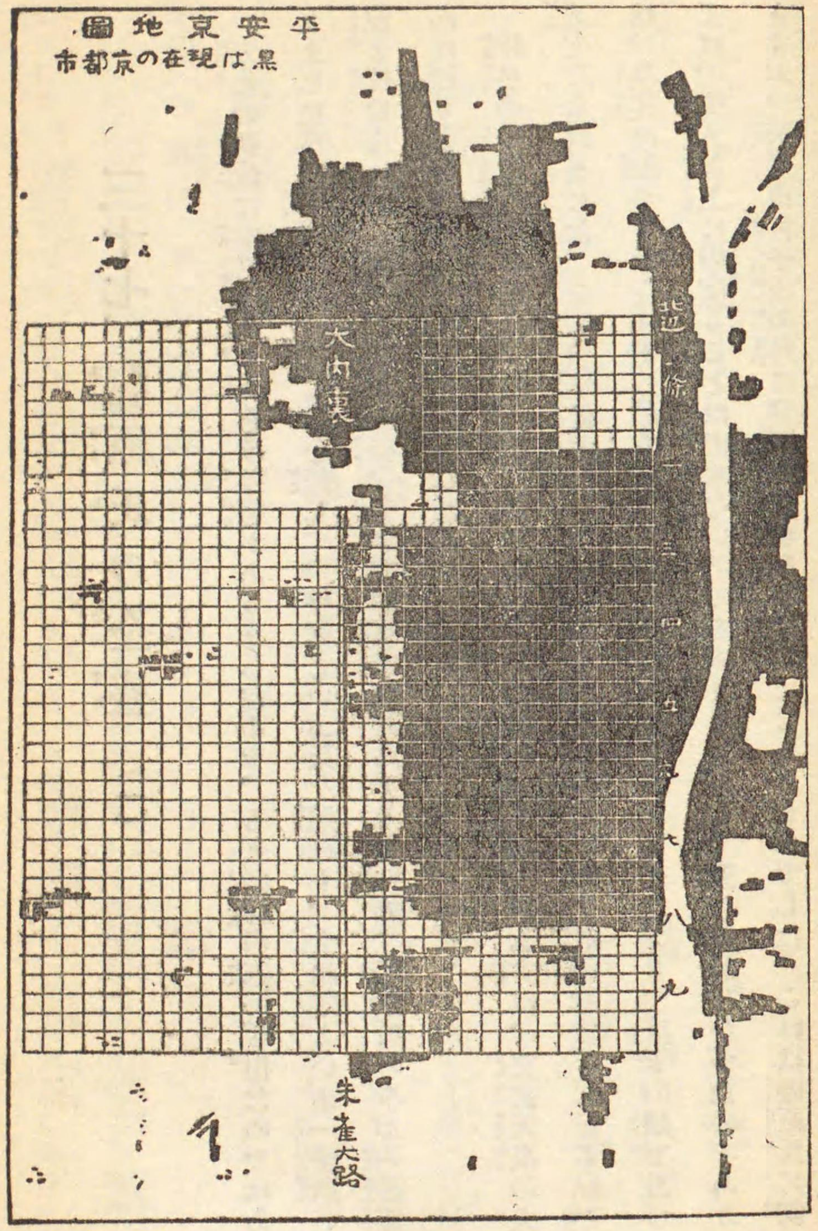
平安京は大體奈良の都の通りで、少しく北へ擴げたのと、道幅が幾らか廣くなつたものがあるくらゐの違ひです。たゞ宮城卽、大內裏には、朱雀門の正面に、大極殿などの朝堂院があり、その東に天皇の御ふだんの御居所たる內裏があります。ことは、奈良の都と違つてゐるところです。これは奈良の時とは違つて、國家の正廳たる大極殿を主とした爲であります。內裏には紫宸殿や、清涼殿などがありますが、その紫宸殿は、もと川勝の

屋敷あとで、紫宸殿の前の橘の木は、川勝の屋敷にあつたものが、そのまゝに殘されたのだと申します。しかしこの宮城も、度々の火事や、戰爭で、あと方もなくなり、今の京都御所は、後に昔の內裏にならつて、別のところへお造りになつたものなのです。

明治二十八年に、平安遷都千百年記念祭を京都で行ひまして、平安神宮を建てゝ、桓武天皇をお祭りしました。この神宮の建築は、大體大極殿にならつたものでありますから、これを見れば、ほゞ昔の朝堂院の樣子もわかりませう。

平安京はこれから後、明治の御代の初めに、明治天皇東京にお移りになりますまで、約千七十年間の帝都となりました。そのうちでも、源頼朝が鎌倉で幕府を開きますまで、約四百年間、日本の政治はこゝで行はれましたので、これを『平安朝時代』と申します。今の京都の市街は、この平安京が西の方で幾らか減り、大いに東の方に延びたものでありまして、今の京都の町筋が、大抵正しく東西に、また南北に通つてをりますのは、昔の平安京の町割りが、大體にそのまゝ殘つてゐる爲であります。





# 三十七、藤原氏の全盛（一）

大化の新政に中臣鎌足が大そう手柄がありましたので、もと祭神の家から出たのではありましたが、別に政治に預る家を起して、藤原といふ氏を賜はり、大織冠といふ一番高い位を授けられました。これから後、昔からの舊家はだん〳〵衰へて、藤原氏のみが一番盛んになりました。

鎌足の子藤原不比等は、右大臣に任ぜられ、その娘の宮子娘といふ方は、文武天皇の夫人となられました。これが聖武天皇の御母君です。この頃までは、皇后となられますお方は、皇族に限つてをられましたので、いかに藤原氏勢力がありましても、臣下の娘であつては、夫人以上にのぼることは出來ないのでありましたから、致し方がなかつたのでありますが、天皇は宮子娘の外に、別に皇后をお立てになりませんでした。これは藤原氏に御



遠慮なされた爲であつたかも知れません。

不比等の次ぎの娘の方は、これも聖武天皇の夫人となられましたが、後に前例を破つて、皇后となられました。これが有名なる光明皇后であらせられます。臣下から皇后がお立ちになりましたのは、これが初めでありまして、これから後皇后は、大抵藤原氏から出られることとなりました。

また不比等の四人の男の子は、武智麻呂、房前、宇合、麻呂と申し、それ〴〵高い官位にすゝみまして、朝廷の大官は、殆ど藤原氏一族で固めるといふ程の勢になりかけましたが、まことに偶然のことで、聖武天皇の御代に、天然痘の大流行がありました時、この四人が皆同じ年のうちに死にました。そしてその子供等は、皆年が若かつたものですから、藤原氏の勢は、やむを得ず一時大いに衰へました。

しかし何分にも、鎌足の大勳功の後をうけた家であります。その後だん〳〵勢力を恢復しまして、奈良朝の末には、藤原百川が大功を立て、その甥の種繼は、桓武天皇におす

めして、都を長岡に移す程の勢となりました。もちろん、外の舊家の人たちの中には、藤原氏のひとり盛んになるのに、反對するものもありまして、種繼暗殺のような事件も起りましたが、これが爲に反對者は罪せられて、かへつて勢力を失ひ、藤原氏ばかりが盛んになるといふ結果になりました。御代々の皇后は、大抵藤原氏からお立ちになる。御代々の天皇は、大抵その藤原皇后のお腹に、お生れになつたお方々であらせられる。大臣を始めとして、朝廷の大官も、大抵藤原氏の人々で固めるといふあり樣で、だん〳〵我がまゝな行ひが多くなつて參ります。

第五十五代文德天皇の皇后は、やはり藤原良房の娘の方でありました。良房は藤原房前の孫の、冬嗣の子です。冬嗣が第五十二代嵯峨天皇の御信任を厚うしてから、藤原氏の家がいくつにも分れた中でも、この家筋が殊に盛んになつたのです。かくて天皇お崩れの時に、その皇后のお腹の皇子は、まだ御九歲といふような、御幼少のお方でありましたが、先帝の御あとをついで、天皇の御位に卽かれました。これを第五十六代淸和天皇と申し上げ



ます。これは日本で御幼少の天皇の初めであります。そして良房は攝政となりました。

昔は御自身御政治をなさるにお差し支へのない程に、お歲を取られたお方でなければ、天皇の御位にはお卽きになりません。それ故に、もし天皇お崩れの後に、後つぎのお方がまだお若くいらせられる時には、皇后が御位に卽かれることもありました。皇極天皇、持統天皇など、皆さうであります。しかしそれは、皇后が皆皇族のお方であらせられた時代のことです。光明皇后以來、皇后が藤原氏からお出になるようになりましては、いくら藤原氏に勢力がありましても、その皇后が天皇の御位に卽かれるわけには參りません。そこで止むを得ぬことであつたではありませうが、こんな御幼少のお方が、天皇となられる例が始まりましたのです。しかし御幼少の天皇では、御自身御政治をなさるわけには參りません。そこで、天皇には御母方の祖父に當る、藤原良房が攝政となつて、天皇にお代り申して、すべての政治を行ふことになりました。今日の皇室の御規則でも、天皇が御幼少にましますとか、或は御病氣などで、御自身御政治をなさることがお出來にならない場合に

は、臨時に攝政をお置きになることになつてをりますが、それは皇太子とか、皇后とか、その外お近しい皇族のお方に限ります。大正天皇陛下御病氣であらせられましたが爲に、今上天皇陛下が、皇太子として攝政であらせられたような次第であります。ところで藤原良房は、御幼少の天皇をお立て申し、臣下として攝政となるの例を始めたのです。

## 三十八、藤原氏の全盛（二）

次ぎに良房の兄の子で、良房の養子となつた基經は、その勢力更に父よりも盛んでありまして、第五十八代宇多天皇の御代に、初めて關白といふことになりました。關白とは、下から天皇に申し上げますにも、また、天皇から下へお命じになりますにも、まづもつてその人を經なければならぬことなのです。つまり關白が承知しなければ、天皇も、大臣も、何も出來ないといふことになるのです。

そんな勢ですから、宇多天皇は、かう藤原氏ばかりに、すべての政治をおまかせになりましては、ます〳〵そのわがまゝがひどくなることを、御心配になりまして、菅原道眞をお引き上げになり、藤原氏の勢力をおさへようとなさいました。かくて次ぎの帝第五十九代醍醐天皇の御代には、基經の子時平は左大臣、道眞は右大臣といふ工合に、相並んで政治にあづかることになりました。

しかしながら菅原氏は、もと學者の家で、昔から大臣になつたことなどは一度もなかつたのであります。さればいかに天皇の御信任がお厚かつたとは申せ、この藤原氏の盛んな時代に、そんな家から出た道眞が、大臣となつて藤原氏と並ぶといふことは、時平に取つては不平でたまりません。その他のものも、道眞がその家柄の低いのにかゝはらず、出世があまりにひどかつたので、自然それをねたむようになります。そんな次第で道眞は、後に太宰府にうつされまして、せっかくの宇多天皇の御心も、かへつて藤原氏の勢力を、一層盛んならしめる結果となりました。



道眞が退けられまして後は、もはや藤原氏と張り合つて、その勢力を分たうといふ程のものもありません。これから後藤原氏の人々は、御幼少の天皇をお立て申しては、自身攝政に任ぜられ、天皇が御成長遊ばしますと、關白に任ぜられるといふ風に、恐れ多いことではありますが、天皇はたゞ尊く上にましますばかりで、政治はすべて藤原氏まかせといふような、ひどい御あり樣になつてしまひました。

## 三十九、藤原氏の全盛（三）

かうなつて來ますと、今度は同じ藤原氏一族の間で、自然競爭が起つて來るのはやむを得ません。

初め藤原鎌足の子不比等に、四人の男の子があつて、それ〴〵肩を並べて立身出世し、朝廷の大官は、大抵藤原氏一族で固めるといふ程の勢でありました。たま〳〵天然痘の大

流行で、四人ともに同じ年の内に死んでしまつたので、藤原氏の衰へたといふことを、さきにお話して置きましたが、もしあの時に天然痘がはやらなんだなら、今の平安朝の藤原氏の全盛は、はやく奈良朝時代に來てをつたのかも知れません。しかし、その子供等が成長しまして、それ〴〵別々の家を起し、だん〳〵と勢力を恢復して參りまして、つひに今のような、藤原氏全盛時代となつたのです。はじめのうちは宇合の子孫が盛んでしたが、後には冬嗣、良房のような人が出たので、房前の子孫たる良房の家が、一番盛んなものになりました。そして外に競爭者がなくなりますと、今度は良房の子孫同士の間に、ひどい競爭が起つて來るのです。

良房が、臣下の身分ではじめて攝政となり、その養子基經が、はじめて關白となつてから、基經の子忠平、忠平の子實賴、實賴の弟師輔の子伊尹、兼通、兼家の兄弟、兼家の子道隆、道兼、道長の兄弟等、みな攝政とか關白とかになりました。かうなると、藤原氏一族の間の爭ひといふよりも、最も親しい筈の兄弟同士の間にまで、ひど



い競爭が起つて參ります。

ところが、これはまことに偶然のことでありますが、昔聖武天皇の御代に天然痘がはやつて、不比等の四人の子が死んだと同じように、それから二百五十七年たつた第六十六代一條天皇の御代に、またひどい天然痘の流行がありました。

そして道隆、道兼を始めとして、藤原氏の大官たちが、たくさん死にましたので、生き殘つた道長のみが、ひとり大そう仕合せをしました。殊に道長に取つて仕合せであつたのは、いくたりものよい娘の子があつたことです。

なんと申しても日本は、萬世一系の天皇陛下を中心と仰ぎ奉る國であります。藤原氏いかに勢力がありましても、又いかに一族の間に競爭が烈しくなりましても、天皇を高く上に戴き奉つて、自分は攝政、關白になるといふより以上のことは出來ません。そしてさうするには、自分の娘を皇后にさし上げまして、そのお腹に皇子がお生れになりますと、それを天皇の御位に卽け奉つて、自分はその御代の攝政ともなり、關白ともなるといふの

であります。

道長には大勢のよい娘の子がありましたが、一人は第六十六代一條天皇の中宮となつて、その御腹に第六十八代の後一條天皇と、第六十九代の後朱雀天皇とがお生れになりました。また一人は第六十七代三條天皇の中宮となり、一人は甥に當らせられる後一條天皇の中宮となりましたが、今一人はこれも御甥の後朱雀天皇の女御となりまして、その腹に第七十代後冷泉天皇がお生れになりました。

中宮とはもと、皇后とか、皇太后とかの御事を申すので、もちろん皇后と同じお身分のお方であります。しかし一條天皇には、前に道長の兄道隆の娘が、すでに皇后になつてをられましたので、お二人の皇后をお立てになるわけには參りません。そこで道長は、別に中宮といふお名前に致しまして、自分の娘を皇后としておすゝめ申しましたので、實は一條天皇には、お二人の皇后が同時にあらせられることになりましたのです。これから後、天皇には、しば〳〵同時に、皇后と中宮との、同じお身分のお方が、お二方あらせられると

藤原道長

いふ例が始まりました。これも道長が、自分の娘を皇后にさし上げたいとの、わがまゝの爲でした。また女御と申しますのは、皇后、中宮よりも一段お身分の低いお方で、昔、光明皇后が、はじめは聖武天皇の夫人であらせられたと申すのと、同じようなものです。

かくて道長は、その娘が三人まで皇后に、今一人が女御に、また外孫に當らせられるお方が、御三方まで引きつゞき、天皇となられましたといふように、昔から曾てためしのない身分となりました。

この世をば、我が世とぞ思ふ望月の
かけたることもなしと思へば

といふのは、かれがその滿足の心を、無遠慮に述べたものですが、なんといふわがまゝな歌でせう。十五夜の月のまん圓いように、思ふことゞくかなうて、少しも不足はない、この世界は、まるで自分の爲の世界のように思はれるといふのです。そしてその世界の中には、思ふこと何一つとしてかなはず、その日、その日を活きて行くにさへ、困つて



ゐる下層の民衆が、どれだけあるか知れないことなどは、一向考へても見ないのです。

## 四十、藤原氏の全盛（四）

そんなあり樣ですから、道長は、どんなことでも、好き勝手なわがまゝを行つてはゞかりません。かれが法成寺を建てた時のごときは、宮中のものでも、役所のものでも、自分のほしいと思ふ庭石などは、勝手に取つて來る。まるで朝廷でも、役所でも、自分のものゝように思うてゐるのです。そのうちに、たまゝ道長が病氣になりまして、いつ死ぬかも知れないといふので、その子賴通は、大そうその工事を急ぎまして、たとひ朝廷の御事は後まはしに致しても、この方の御用は怠るなと、催促したとまでいはれてをります。なんといふ不敬なことでありませう。

昔蘇我氏は、物部氏を滅ぼして後に、外に競爭者もなくなつた爲に、ひとりわがまゝな

ことをして、つひにはその子を王子といひ、家を宮門といひ、墓を陵といふなど、ほとんど天子氣取りにまでなりました。この藤原氏も外に競爭者がなくなり、殊に道長は、同じ藤原氏の中でも、自分ばかりが一番勢力を得たものですから、とう〳〵こんなことにまでなつてしまつたのです。

道長の子頼通、教通、頼通の子師實、師實の子師通、師通の子忠實、忠實の子忠通と、代々相ついで、攝政、關白になりました。中にも頼通は、第六十八代後一條天皇の御代から、第七十代後冷泉天皇の御代まで、五十餘年の間、廿六歳からはじめて、七十七歳になるまでも、その職にをりましたので、攝政、關白は、自然この家のものときまつてしまひ、同じ藤原氏の人々でも、外の家筋のものは、指一つさすことが出來なくなつてしまひました。後に第七十一代後三條天皇御位に即かれまして、藤原氏のあまりにわがまゝなのをお抑へにならうとなさいましたので、頼通も幾分御遠慮申し、關白を弟教通に讓つて、宇治に退隱しました。宇治の平等院は頼通の隱居したところで、その鳳凰堂は今も殘り、



藤原氏の榮華のあとを示してをります。

藤原氏の全盛は、道長、頼通の時を頂上として、後三條天皇以後、その勢力もやゝ衰へました。

次ぎの第七十二代白河天皇は、御位を御年僅に八歳の第七十三代堀河天皇にお讓りになりました後、上皇の御身ながらに、御自身御政治を行はせられ、後に御出家遊ばして、法皇とならせられましても、相變らず御政治をなさるといふ例をお始めになりました。これを院政と申します。院政の世には、天皇はこれまで通り、たゞ尊く上にましますばかりで、御政治は萬事上皇なり、法皇なりにお任せきりであります。しかしこれが爲に、藤原氏の攝政、關白も、またその名前ばかりで、前々程のわがまゝは出來なくなりました。

かく藤原氏の勢も、院政以來だん〳〵衰へましたが、なんと申しても多年植ゑつけられた大きな森林です。そしてその中でも、道長の子孫は一番高い大木です。忠通の子の基實、基房、兼實は、それ〴〵攝政、關白となり、後に基房の子孫は衰へましたが、基實は近衞

家の先祖となつて、その家から鷹司家が分れ、兼實は九條家の先祖となつて、その家から二條、一條の二家が分れ、後の世の攝政關白は、必ずこの五家から出るといふことにきまりました。之を五攝家と申し、その子孫は今もそれ〴〵華族となり、華族の中でも一番高い公爵となつてをります。その外にも藤原氏から分れ出た家は非常に多く、代々朝廷の大官に任ぜられ、華族として今にその家を傳へてゐるものが、甚だ多いのであります。今の華族には、昔から引き續き朝廷にお仕へ申してゐた家柄の公家華族、或は大名であつた家柄の武家華族、その外勳功によつて新に賜はつた新華族など、いろ〳〵の種類はありますが、その中でも公家華族の方々は、大部分藤原氏の流れを受けたものであります。

## 四十一、地方政治の亂れ　（一）

藤原氏の長い間のわがまゝな行ひは、日本の政治をめちゃ〳〵にしてしまひました。これはもとより、藤原氏ばかりの罪といふわけではなく、世の中が自然、さういふ風になつて來たのではありますが、上に立つて人民を導くべき筈の大官たちが、自分の勢力の盛んなのにまかせて、好き勝手なことをしてゐる間に、いつとはなしに、だん〳〵と、世の中がくづれてしまつたのですから、藤原氏に責任がないとはいはれません。

大化の新政は、天下の土地人民を皆國家に屬するものとして、人民にはそれ〴〵、同じだけの田地を、口分田としてお割り當てになつたのでありましたから、これがうまく續いて行つてさへくれますれば、世間にひどい貧乏な人もなければ、又ひど〳〵富んだといふものもなく、みんなが同じように、幸福に生きて行くことが出來た筈でありましたが、實際にはさう都合よくは參りませんでした。第一に、人間の數がだん〳〵と殖えて參ります。人間の數が殖えれば、割り當てる田地が足りなくなる。新に荒れ地を開墾せねばなりませんが、開墾したとて、それが自分のものになるのでなければ、誰もそんなことに骨折るものはありません。そこで新に開墾したものには、その土地をその人のものにするといふこ

とに、自然なつてまゐります。

第二に、これは前にもちよつと申したことですが、人間には勉強するものもあれば、怠けものもある。達者なものもあれば、病身なものもある。智恵の多いものもあれば、一向物のわからぬ愚物もある。正直なものばかりが揃つてをればよいが、中には他人の物でも取らうといふ横着ものも少くない。自然いつまでもすべての人が、同じ暮しをするといふわけには參りません。第三に、大きな手柄のあつたものが、褒美に土地を賜はるとする。その土地は當然その人の物にならねば、褒美の意味になりません。そんな次第で、自然に勢力のあるところへ、富が集つて參ります。口分田といふ結構な規則も、だん〳〵行はれなくなつて參ります。第四に、勢力のあるものが、莊園といふ名をつけて、たくさんの土地を自分のものにするといふような、惡い習慣がひどくなりました。莊園となれば、もはやその土地や、その土地に住んでゐる人民は、國家のものでありませんから、租稅を納めることもいらねば、國司も手をつけないのです。そんな工合で、世の中がめちや〳〵に亂れ



て來ないでをられませうか。

莊園のはじめは、荒れ地を宅地の附屬にするくらゐの、ちよっとしたことでありましたが、それを開墾して、自分のものにする、或はそれを神社や、寺に寄附するとかいふようなことになり、それがだん〳〵大袈裟になつて來て、勢力のあるものは、いろ〳〵の理由をつけて、廣い地面を自分のものに取りこんでしまふようになる。それを藤原氏のような大官からして、先に立つて始めたのですから、なんとも仕方がありません。横着なものは、自分の地面を藤原氏のような有力者に寄附して、その莊園にして貰ひ、自分は莊園の民になるといふような、惡いことを考へ出します。自分が公民であり、又その土地が自分のものであれば、國家へ租稅を出さねばならず、國司からもいろ〳〵と課役をかけられますが、莊園となればそれがいらぬ。ことに自分は地頭といふ名義で、相變らずその土地を支配して、僅ばかりの分け前を、その莊園の名前主に與へて、あとは自分が取つてしまふのです。莊園主は、たゞその名前を貸したばかりで、懷手をしてゐて所得の分け前が貰へ

る。もとの地主は、少しばかりの分け前を莊園主に出すだけで、あとは自分のまる取りとなる。その上某殿の莊園の地頭だといふようなことで、虎の威を借る狐といふ工合に、いばつて世の中を渡ることが出來るのでありますから、双方ともに、これほど得なことはありません。そしてこれが爲に、國家がまる損をしてゐても、そんなことは少しも考へて見ないのです。

莊園となりますと、國司も手をつけることが出來ません。そしてそれがだん〳〵と殖えて來て、國司の支配する土地が次第に減つて參ります。それではならぬと思ふような、忠實な國司がたまにありましても、もと〳〵國司を任じたり、免じたりする力のある朝廷の大官が、その莊園主であるのですからたまりません。自分に都合の惡いような國司は、さっさと免職してしまひます。それで國司になつたものも、忠實にその職務をつとめることが出來ません。また忠實につとめてもつまりませんから、出來るだけのわがまゝをして、人民から搾りあげて、自分の懷を肥やさうと致します。人民こそよい面の皮です。上の方



では攝政關白を始めとして、朝廷の大官たちが、好き勝手な遊びをして、日夜榮華にふけつてをります間に、下の方では一般民衆が、食ふや食はずの苦しみを、嘗めてゐたのでありました。

後三條天皇は、御英邁にわたらせられまして、これではならぬとお考へになりましたから、新に莊園を作ることをお止めになり、これまであるものでも、わけのわからぬものは御廢止になされる御方針でありましたが、何分長い間に、だん〳〵と出來て來た習慣でありますから、それが當り前といふことになつてをりまして、なか〳〵立て直しが出來ません。つひには日本中の土地は、大方莊園といふことで、少數の貴族や、寺院などのものとなり、その莊園を支配してゐる地頭等は、主人の威光を笠にきて、いばつてをりますが、一般人民は、大抵水呑み百姓といふような、まことに氣の毒なものになつてしまひました。

# 四十二、地方政治の亂れ　（二）

藤原氏をはじめとして、その頃の貴族たちが、たくさんの莊園を持つて榮華をきはめてゐる時に、一般民衆が、どんなに苦しんでゐたかといふことは、その頃の戸籍を見れば一番よくわかります。戸籍には、その時の人民の名や、年が殘らず書いてありますが、それがまあどうでせう。その頃の戸籍には、男と子供とがごく少くて、女と老人が甚だ多いのです。そんなことが實際にあらう筈はありませんが、戸籍がまさにさうなつてゐるのだから不思議です。延喜二年の阿波の國の戸籍が少しばかり殘つてゐるのを見ますと、名と年とのわかるものが、五百五十人の中で、四百八十三人までが皆女で、男は僅に六十七人しかありません。女八人に男一人といふくらゐの割りあひです。また十歳以下の子供は一人もなく、二十歳以下の少年青年が、僅に八人あるだけで、その代りに八十歳以上の年



寄りが、九十五人もあり、中には百十歳などといふのがあるのです。

これは一體どうしたことなのかと申すに、この頃國司は政治に怠つて、實際の人口調べなどはせず、生れても出生屆けがなければ戸籍に加へない。死んでも死亡屆けがなければ戸籍から除かないといふのですから、前に子供であつたものも、だん〳〵大人になりまして、戸籍の上では子供がなくなり、その代りに死んでも除きませぬから、だん〳〵年寄りが戸籍の上に殖えて來るのです。これではせつかくの大化の新政の口分田などは、割りあてゝ見ようもありません。

また男が至つて少いのは、課役といつて、男には國司からいろ〳〵の面倒な爲事をいひつけて來る。いろ〳〵の物を取り立てに來る。自分の土地を莊園に寄附して、自分が地頭になるといふような横着なものゝ出るのも、實は國司からあまりに責められるのがつらい爲で、實際致し方もなかつたのですが、それも出來ないものは、國司の責めが恐ろしさに、國を逃げ出したり、また僧侶になつたりして、戸籍から削られてしまふのです。そし